

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

多肥松林遺跡

2017.11

香川県教育委員会

序 文

本書には、県道太田上町志度線道路改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥上町に所在する多肥松林遺跡（たひまつばやしせいせき）の報告を収録しています。

多肥松林遺跡では、弥生時代中期から近世にかけての遺構・遺物が出土し、高松平野中央部に所在する遺跡南部の土地利用について、詳細な情報を得ることができました。このうち弥生時代終末期の溝からは、本県においては類似遺構に乏しい堰遺構が検出され、当該時期における水利灌漑にかかわる貴重な資料となるものと考えられます。また、古代の包含層からは、円面硯2点のほか転用硯が出土し、供伴遺物がなく時期決定が困難な釵具が当該時期の資料だとすれば、遺跡周辺での下級官人層の活動の可能性も想定されます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係各機関・地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年11月

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

例 言

- 1 本報告書は、県道太田上町志度線道路改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥上町に所在する多肥松林遺跡（たひまつばやしせいせき）第3次調査の報告である。
- 2 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

第3-1次調査
期間 平成9年4月1日～平成9年12月31日
担当 文化財専門員 西村尋文 主任技師 溝渕大輔

第3-2次調査
期間 平成10年10月1日～平成11年3月31日
担当 文化財専門員 植松邦浩 技師 豊島 修
- 4 調査にあたっては次の関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。
高松市教育委員会、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第IV系)で、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。
SH 竪穴建物 SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 旧河道
SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位:m）である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。

12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

- 弥生土器：信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」
『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』、古代学協会四国支部
- 信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』、香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構普通病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構普通病院
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 須恵器： 田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし ー大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 ー』
- 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40周年記念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室
- 中・近世：尾上実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』、藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター
- 太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡XV ー陶磁器分類編ー』
- 乗岡実 2000「中世の備前焼甕(壺)の編年案・紀年銘資料にみる大甕(壺)の変遷」『第2回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乗岡実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乗岡実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』、岡山市教育委員会
- 藤澤良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」、高志書院
- 森田稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号、神戸市立博物館
- 山本悦世 2007「鹿田遺跡における土師質土器碗の編年について」『鹿田遺跡5』、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

本文目次

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	1

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査	4

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構・遺物	21

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 多肥松林遺跡の自然科学分析1	103
第2節 多肥松林遺跡の自然科学分析2	111
第3節 放射性炭素年代測定	114

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	118
第2節 古代の多肥松林遺跡	122

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第52図	SR05平・断面・出土遺物実測図	58
第2図	周辺遺跡分布図	5	第53図	古墳時代～古代遺構配置図	59
第3図	周辺遺跡調査区位置図	6	第54図	SP07平・断面・出土遺物実測図	60
第4図	自然河川の分布と各遺跡の遺構名の対応関係	8	第55図	SD04・SD05平・断面・出土遺物実測図	61
第5図	調査区範囲	9	第56図	SD04出土遺物実測図	63
第6図	基本土層図	10	第57図	SD06・SD07平・断面図	64
第7図	I区北壁土層断面図	11	第58図	SD06・SD07出土遺物実測図	65
第8図	I区南壁土層断面図	12	第59図	SD08～SD10平・断面・出土遺物実測図	66
第9図	IIa区南壁土層断面図	13	第60図	SD33平・断面図	67
第10図	IIa区東壁土層断面図	14	第61図	SB01平・断面図	68
第11図	IIa区北壁土層断面図	15	第62図	中世遺構配置図	69
第12図	IIb区北壁土層断面図	16	第63図	SB02平・断面図	70
第13図	IIb区東壁・南壁土層断面図	17	第64図	SB03平・断面・出土遺物実測図	71～72
第14図	IIIa区・IVa区北壁土層断面図	18	第65図	SB04平・断面・出土遺物実測図	73
第15図	IIIa区南壁土層断面図	19	第66図	SB05平・断面・出土遺物実測図	74
第16図	IVa区・IVb区南壁土層断面図	20	第67図	SB06平・断面図	75
第17図	IVb区東壁土層断面図	21	第68図	柱穴出土遺物実測図	76
第18図	Va区西壁・Vb区東壁土層断面図	22	第69図	SK09・SK14・SK48平・断面・出土遺物実測図	77
第19図	Va区・Vb区北壁土層断面図	23	第70図	SD25平・断面・出土遺物実測図	77
第20図	弥生時代遺構配置図	24	第71図	SD57・SD60平・断面・出土遺物実測図	78
第21図	SH01平・断面図	25	第72図	SK115平・断面・出土遺物実測図	80
第22図	SK07平・断面図	25	第73図	SK121平・断面・出土遺物実測図	81
第23図	SD01平・断面図	26	第74図	近世遺構配置図	82
第24図	SD03平・断面図	27	第75図	SK114平・断面図	83
第25図	SD43・SD44平・断面・出土遺物実測図	28	第76図	SK114出土遺物実測図	84
第26図	SK08平・断・立面図	29	第77図	SD18・SD27・SD28平・断面図	86
第27図	SD55平・断面図	30	第78図	SD30平・断面・出土遺物実測図	87
第28図	SD58平・断面図	31	第79図	SD31・SD32・SD34平・断面図	88
第29図	SD62・SD63平・断面・出土遺物実測図	32	第80図	SD54平・断面・出土遺物実測図	89
第30図	SR01断面図	33	第81図	SD67平・断面・出土遺物実測図1	90
第31図	SR01・SR02断面図	34	第82図	SD67出土遺物実測図2	91
第32図	SR01最下層出土遺物実測図	35	第83図	時期不明遺構配置図	93
第33図	SR01下層出土遺物実測図	36	第84図	SK01～SK06・SK08平・断面図	94
第34図	SR01中層出土遺物実測図1	37	第85図	SK10～SK13・SK15～SK18平・断面図	95
第35図	SR01中層出土遺物実測図2	38	第86図	SK19～SK27平・断面図	96
第36図	SR01中層出土遺物実測図3	39	第87図	SK28～SK36平・断面図	97
第37図	SR01中層出土遺物実測図4	40	第88図	SK37～SK47平・断面図	98
第38図	SR01中層出土遺物実測図5	41	第89図	SK50・SK51平・断面図	99
第39図	SR01上層出土遺物実測図1	42	第90図	SD17等断面図	99
第40図	SR01上層出土遺物実測図2	43	第91図	包含層等出土遺物実測図	101
第41図	SR01最上層出土遺物実測図1	44	第92図	曆年校正結果	104
第42図	SR01最上層出土遺物実測図2	45	第93図	曆年校正結果	117
第43図	SR02出土遺物実測図	47	第94図	曆年代のマルチプロット図	117
第44図	SK07～SK10位置図	48	第95図	遺構変遷図1	120
第45図	SK07平・断面・出土遺物実測図	49	第96図	遺構変遷図2	121
第46図	SK09平・断面図	50	第97図	分節化された多配郷南部の空間構造	125
第47図	SK09出土遺物実測図	51	第98図	香川郡内の郷と古代寺院	127
第48図	SK10平・断面図	53	第99図	宝寿寺跡と前田東・中村遺跡の被り空間	129
第49図	SK10出土遺物実測図	55	第100図	香川県における律令的祭祀遺跡分布図	131
第50図	SR03・SR04平・断面図	56	第101図	県内の祭祀遺物の変遷	133
第51図	SR03・SR04出土遺物実測図	57	第102図	祭祀遺跡の階層性	137

目次

第1表	周辺の調査履歴	7	第15表	土器観察表(6)	147
第2表	時期不明の土坑一覽	92	第16表	土器観察表(7)	148
第3表	時期不明の溝一覽	100	第17表	土器観察表(8)	149
第4表	放射性炭素年代測定結果	104	第18表	土器観察表(9)	150
第5表	樹種同定結果	105	第19表	土器観察表(10)	151
第6表	器種別種類構成	107	第20表	土器観察表(11)	152
第7表	樹種同定結果	111	第21表	土器観察表(12)	153
第8表	測定試料および処理	114	第22表	土器観察表(13)	154
第9表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	115	第23表	土器観察表(14)	155
第10表	土器観察表(1)	142	第24表	土製品観察表	155
第11表	土器観察表(2)	143	第25表	平瓦観察表	155
第12表	土器観察表(3)	144	第26表	石器・石製品観察表	156
第13表	土器観察表(4)	145	第27表	金属器観察表	156
第14表	土器観察表(5)	146	第28表	木器観察表	156

写真目次

図版1	多肥松林道跡の木材(1)	108	II区SX08全景(南より)	
図版2	多肥松林道跡の木材(2)	109	II区SX08全景(南東より)	
図版3	多肥松林道跡の木材(3)	110	II区SX08石確出土状況(西より)	
図版4	多肥松林道跡の木材(4)	113	図版14	遺構写真10
図版5	遺構写真1	158	II区SR01・SR02全景(東より)	
I a・I c・I d区全景(北上空より)			II区SR01全景(西より)	
II a区全景(西上空より)			II区SR01・SR02全景(東より)	
II区全景(東上空より)			図版15	遺構写真11
図版6	遺構写真2	159	II区SR01土層断面(西より)	
II b区全景(南上空より)			II区SX07・SX09全景(東より)	
III区全景(北上空より)			II区SX07・SX09全景(西より)	
IV区全景(北上空より)			図版16	遺構写真12
図版7	遺構写真3	160	II区SX07・SX09全景(南東より)	
I a区全景(東より)			II区SX07木製品出土状況(南より)	
I c区全景(北より)			II区SX07木製品出土状況(西より)	
I d区全景(東より)			図版17	遺構写真13
図版8	遺構写真4	161	II区SX07木製品出土状況(西より)	
I区SP07遺物出土状況(西より)			II区SX09枕1出土状況(南より)	
I区SD04～SD10全景(北西より)			II区SX09枕2出土状況(南より)	
I区SD04遺物出土状況(東より)			図版18	遺構写真14
図版9	遺構写真5	162	II区SX10全景(北より)	
I区SD06遺物出土状況(東より)			II区SX10全景(北西より)	
I区SD06遺物出土状況(南東より)			II区SX10遺物出土状況(西より)	
I区SD08遺物出土状況(西より)			図版19	遺構写真15
図版10	遺構写真6	163	III a区西半部全景(東より)	
I区SD27～SD30全景(北より)			III a区全景(東より)	
II a区全景(東より)			III a区東半部全景(北西より)	
II a区全景(東より)			図版20	遺構写真16
図版11	遺構写真7	164	III b区全景(西より)	
II区SD33全景(西より)			III b区全景(東より)	
II区SD43・SD44全景(東より)			III区SB01全景(北より)	
II区SD43・SX08全景(南より)			図版21	遺構写真17
図版12	遺構写真8	165	III a区SB02・SR01全景(東より)	
II区SX08土層断面(北東より)			III a区SR01全景(北西より)	
II区SX08全景(東より)			III a区SR01西壁土層断面(東より)	
II区SX08全景(西より)			図版22	遺構写真18
図版13	遺構写真9	166	III a区SR01南壁最上層(北より)	

Ⅲ a 区 SD57 全景 (北より)	
Ⅲ a 区 SB02 全景 (北より)	
図版 23 遺構写真 19	176
Ⅳ区全景 (西より)	
Ⅳ a 区 SR03 全景 (南より)	
Ⅳ a 区 SR03 南壁土層断面 (北より)	
図版 24 遺構写真 20	177
Ⅳ b 区 SR04 全景 (南東より)	
Ⅳ b 区 SR04 全景 (南より)	
Ⅳ b 区 SR04 南壁土層断面 (北より)	
図版 25 遺構写真 21	178
Ⅳ a 区 SH01 全景 (北より)	
Ⅳ a 区 SH01 中央土坑 (SK49) 土層断面 (東より)	
Ⅳ a 区 SH01 中央土坑 (SK49) 全景 (東より)	
図版 26 遺構写真 22	179
Ⅳ区中世掘立柱建物全景 (西より)	
Ⅳ区 SB03 ~ SB05 全景 (西より)	
Ⅳ b 区 SB05 全景 (南より)	
図版 27 遺構写真 23	180
Ⅳ a 区 SB04 (SP489) 根石出土状況 (北より)	
Ⅳ a 区 SB04 (SP493) 根石出土状況 (南より)	
Ⅳ a 区 SB03 (SP504) 遺物出土状況 (南より)	
図版 28 遺構写真 24	181
Ⅳ a 区 SB03 (SP483) 根石出土状況 (西より)	
Ⅳ a 区 SB03 (SP487) 遺物出土状況 (西より)	
Ⅳ b 区 SB03 (SP546) 根石出土状況 (西より)	
図版 29 遺構写真 25	182
Ⅳ a 区 SX114 全景 (西より)	
V 区全景 (西より)	
V 区全景 (東より)	
図版 30 遺構写真 26	183
V b 区 SR05 全景 (西より)	
V a 区 SD67 全景 (南より)	
V 区遠景 (東より)	
図版 31 遺物写真 1	184
22・58・98・139・144・145・149・173・201・271・	
272・293・319・322・343・346・349・359	
図版 32 遺物写真 2	185
276・361・378・385・392・414・419・425・432・433・	
444・445・447・450・452	
図版 33 遺物写真 3	186
6・43・150・151・152・153・154・155・174・175・	
176・277・285・308・341・364・365・428・438・	
453・454	
図版 34 遺物写真 4	187
448・449	
図版 35 遺物写真 5	188
7・8・9・44・45・46・286・287・288・289・290・	
291・347・348・387・410	
図版 36 遺物写真 6	189
342・411・412・413・455・456・動物遺体 1・2	

付図目次

付図1 多肥松林遺跡平面図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県道太田上町志度線道路改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成8年度に、香川インテリジェントパークより西の県道43号中徳三谷高松線までの間において試掘調査を実施した。その結果、調査対象地のうち一部のトレンチで、弥生時代等の遺構・遺物が確認されたことから、調査範囲の西側部分について多肥松林遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断し、事前に発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査と整理作業の経過

試掘調査の結果を受けて香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下、財団センターと略す）及び香川県土木部道路建設課と協議を進め、平成9年度に財団センターが事前の発掘調査を実施することで合意し、平成9年4月1日に香川県教育委員会と財団センターとの間で「埋蔵文化財調査契約書」を締結した。



第1図 遺跡位置図

発掘調査は、用地買収の終了した6,792.68㎡を対象に、平成9年4月1日～同年12月31日に実施した。調査は、掘削及び仮設工事を業者に請負わせる工事請負方式で実施した。また、平成10年度には未退去家屋部分1,027.09㎡について、隣接する多肥宮尻遺跡とともに、平成10年10月1日～平成11年3月31日に追加調査を直営方式で実施した。

整理作業は、平成28年10月1日から翌平成29年3月31日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28㎡入りコンテナ98箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成9年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会文化行政課				財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総括	課長	菅原	良弘	総括	所長	大森	忠彦
	課長補佐	北原	和利		次長	小野	喜純
	副主幹	渡部	明夫	総務	参事	別枝	義昭
総務	係長	山崎	隆		副主幹	田中	秀文(6月1日～)
	主査	星加	宏明(～5月31日)		係長	前田	和也(～5月31日)
	主査	松村	崇史(6月1日～)		主査	西川	大
	主事	打越	和美		主事	佐々木	隆司
埋蔵文化財	文化財専門員	木下	晴一		主事	細川	信成(6月1日～)
	技師	塩崎	誠司	調査	参事	近藤	和史
					主任文化財専門員	大山	真光
					文化財専門員	西村	尊文
					主任技師	溝淵	大輔
					調査技術員	佐々木	明子

平成10年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会文化行政課				財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総括	課長	小原	克己	総括	所長	菅原	良弘
	課長補佐	北原	和利		次長	小野	喜純
	副主幹	渡部	明夫	総務課	参事	別枝	義昭
	副主幹兼係長	西村	隆史		副主幹	田中	秀文
総務	係長	中村	慎伸		主査	長尾	寿江子(6月1日～)
	主査	三宅	陽子		主任	佐々木	隆司(～5月31日)
	主査	松村	崇史	調査	参事	長尾	重彦
埋蔵文化財	係長	西村	尊文		主任文化財専門員	大山	真光
	主任技師	塩崎	誠司		文化財専門員	植松	邦浩
					技師	豊島	修
					調査技術員	香川	直孝

平成28年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課				香川県埋蔵文化財センター			
総括	課長	小柳	和代	総括	所長	増田	宏
	副課長	片桐	孝浩		次長	森	悟也
総務・生涯学習推進グループ				総務課	課長	森	悟也(兼務)
	副主幹	松下	由美子		副主幹	斎藤	政好
	主事	和木	麻佳		主任	寺岡	仁美
文化財グループ					主任	丸尾	麻知子
	主任文化財専門員	山下	平重		主任	西谷	敬司
	主任文化財専門員	乗松	真也		主任	岩崎	昌平
				資料普及課	課長	古野	徳久
					主任文化財専門員	藏本	晋司

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

調査地は高松市多肥上町 1214 番地ほかに位置する。後述するように、本調査地は複数次に亘り調査された本遺跡の調査地のなかで最も南に位置する。遺跡は、高松平野のほぼ中央部に位置し、現地表面の標高は概ね 23.1 m 前後を測る。

遺跡の西約 3 km を北へ流下する香東川は、讃岐山脈に水源を有し、延長約 33.0 km、流域面積約 113.2 km² の 2 級河川である。遺跡は、この香東川により形成された高松平野の扇状地上に立地する。香東川の扇状地は、扇面積約 50 km²、平均勾配約 7% で、遺跡周辺も約 7% の緩傾斜扇状地上にある。

遺跡周辺の基盤層を形成する扇状地礫層の上面は、粘土やシルトなどの細粒堆積物に覆われる。それら堆積層中には鬼界アカホヤ火山灰層が介在することが知られ、また遺跡の北東約 2 km に所在する大池遺跡周辺で有舌尖頭器が採集されるなど、扇状地上面の堆積物の少なくとも上位層は、縄文時代前半期には堆積環境にあったことが知られる。

平野中央部での遺跡の形成は、縄文時代晩期に遡り、上述した細粒堆積物を穿ち、遺構が形成される。林・坊城遺跡では、細粒堆積層上面の窪地を埋積する流路堆積層より、土器や石器とともに木製農具が出土している。海退期以降当該期に至り、平野中央部に漸く居住に適した安定した地形環境が形成されていたことが想像される。

第2節 歴史的環境

多肥松林遺跡が所在する高松市多肥上町周辺では、本遺跡の調査の契機となった県道の建設や高等学校の新設、民間開発等により、83,000 m² 以上の遺跡が調査されている。

調査された遺跡では、本遺跡や松林遺跡（高松市教育委員会 1996）、多肥宮尻遺跡（香川県教育委員会 2017）等で検出された自然河川より出土した縄文時代晩期の遺物が、最も古く位置付けられる。自然河川以外に明確な遺構はなく、集落等の詳細については今後の調査に期待される。

弥生時代前期の遺構・遺物の出土遺跡として、松林遺跡（高松市教育委員会 1996）と多肥宮尻遺跡（高松市教育委員会 2004b）があり、中期になると、本遺跡を含め日暮・松林遺跡（高松市教育委員会 1997）等で竪穴建物や掘立柱建物等で構成される集落が検出されている。中期後葉～後期前半の遺構・遺物は再び不明瞭となるが、後期後半～古墳時代前期前葉にかけて、本遺跡や日暮・松林遺跡（高松市教育委員会 1997）等で再び竪穴建物や掘立柱建物がみられるようになる。現状では、弥生時代は多肥上町地区東半部を中心に開発が進展していたようだ。

古墳時代前期後半～古墳時代中期の遺構・遺物は乏しく、後期～終末期にかけて、本遺跡や多肥宮尻遺跡等で溝等の遺構が、多肥北原遺跡（香川県教育委員会 2012）や多肥北原西遺跡（香川県教育委員会 2015）で、竪穴建物や掘立柱建物がそれぞれ検出されている。弥生時代とは一転して、多肥上町地区西部地域に居住域が移動し、東部地域は耕地等の生産域として利用されたと考えられる。

古代には、本地域は北に隣接する多肥下町地区とともに、香川郡多配郷（和名抄）の遺称地とされる（川野・武田 1989）。東に隣接する山田郡との郡界は、多肥宮尻遺跡東端部を南北に走向し、つまり多配郷は香川郡東端部に位置し、東は山田郡拝師郷に、北から西は香川郡大田郷に、南は香川郡百相郷にそれ

ぞれ接し、南約1.2kmを古代南海道推定地が東西走する環境にある。多肥郷が属する香川郡は、和名抄には多肥郷以下14郷が記載され、上郡に位置付けられる。また、平城宮跡や長岡京跡出土の木簡や文獻上には、渡来系氏族とされる秦氏関係の氏族が多く居住していたことが知られる(木原1988)。

古代においても、多肥地区開発主体の西部域への偏在は継続する。多肥上町地区西端部には多肥廃寺が建立され、その北約200mに位置する多肥北原西遺跡(香川県教育委員会2015)では、溝等より鬼瓦や軒瓦を含む多量の瓦片のほか、多口瓶や陶甕、多量の鉄滓や工具を含む鉄製品が出土しており、遺跡周辺で多肥廃寺建立・経営に伴う諸施設が存在が想定される。一方、本遺跡周辺の東地区でも、溝等より斎申や人形、墨書土器が出土しており(香川県教育委員会・跡香川県埋蔵文化財調査センター1999)、祭祀空間として機能していたことが考えられる。この点については、第5章で検討したい。

中世には、本遺跡(香川県教育委員会・跡香川県埋蔵文化財調査センター1999、香川県教育委員会2016、本書)や多肥平塚遺跡(香川県教育委員会2013)で複数棟の掘立柱建物で構成される屋敷地が、多肥宮尻遺跡(高松市教育委員会2004b)、日暮・松林遺跡(高松市教育委員会1997、同2005a～d)では溝や土坑等がそれぞれ検出されている。屋敷地は11～12世紀前半代の中世前半期が主体^(註1)であり、床面積30m以下の小規模な建物のみで構成される。また、各屋敷地の区画施設は不明瞭で、敷地面積は特定できないが、建物群はややまとまって配され、広大な屋敷地は復元できそうにない。小規模屋敷地が微高地部を中心に散在する、散村的景観が復元されよう。また、耕作痕と考えられる遺構が本遺跡(香川県教育委員会・跡香川県埋蔵文化財調査センター1999)周辺で確認されており、屋敷地間は水田や畑として利用されていたと考えられる。

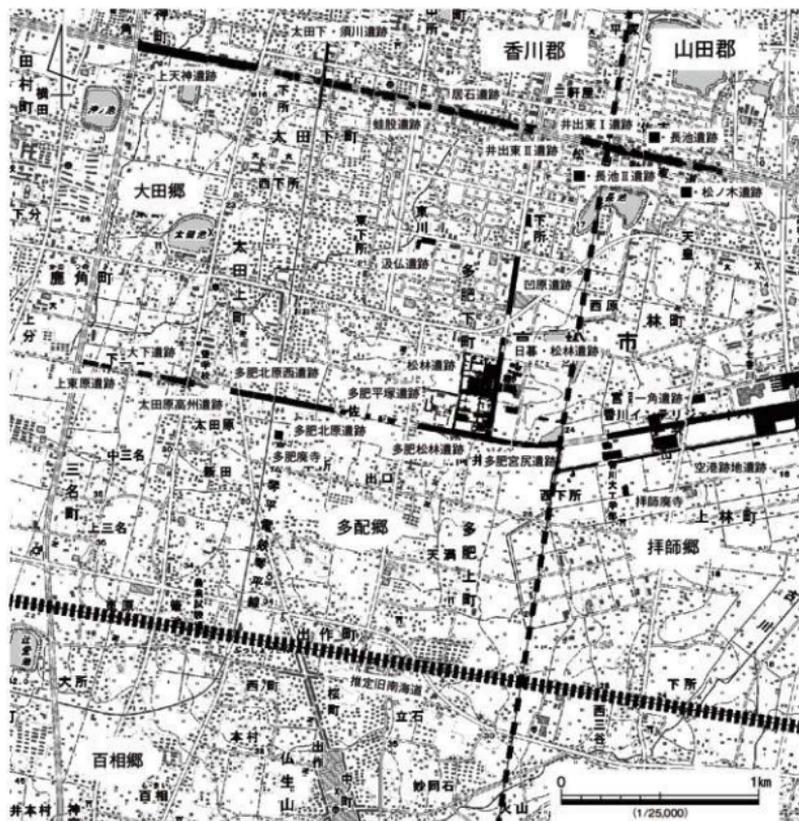
なお、13世紀前葉には、多肥郷は藤原定家の娘で後堀河天皇中宮に仕えた民部卿典侍因子の出仕料に充てられていたことが文獻(『明月記』寛喜元年(1229)10月20日条)に記される(川野・武田1989)。その後、嘉元四年(1306)の昭慶門院領目録案(竹内文平氏旧蔵文書)には、讃岐国公領分として多肥郷がみえ、院庁下文で前中納言中御門方為方が相伝知行を認められている(川野・武田1989)。さらに、明德元年(1390)8月3日の中沢信明讓状(中沢文書)には、中沢氏が多肥郷内の「うなさかのやしろ」を相伝の地としていたことが記されている(川野・武田1989)。

中世後半期には、遺構・遺物の出土は乏しくなる。本遺跡等で、溝等の遺構は確認されているものの、当時の土地利用の実態を解明するような資料には恵まれていない。文献史料の面でも、生駒親正宛行状(大山家文書)の天正十九年(1591)6月3日条まで、多肥郷に関する同時代史料は残されていないようである。城館遺跡として、乃生氏の居城とされる高木城が、多肥上町にあったとされ、多肥小学校の南側に想定されている(香川県教育委員会2003)。乃生氏は、もと坂出市高屋郷の神谷氏の末で、乃生孫兵衛元忠の代に多肥郷に移り、天正八年(1580)の香西氏との戦に敗れ、この時に高木城も焼失したとされる(川野・武田1989)。城跡については、未調査のため詳細は不明である。なお、江戸時代の安永六年(1777)に、乃生氏の後裔の喜多家が、上多肥村の大庄屋に就任している(川野・武田1989)。

近世には、各遺跡で土坑や溝等の遺構が検出されている。条里型地割に合致して配された幹線水路の多くは、近・現代へと継続して維持され、現在みられる田園風景は、近世において成立したものと考えられる。なお、江戸時代を通じて多肥郷の石高は、1,300石前後であったようだ。

第3節 既往の調査

調査地周辺では、近年学校や店舗・病院建設、宅地開発等により調査が周密に実施され、第3図、第



第2図 周辺遺跡分布図（国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」に一部加筆して掲載）

1表に示されるような調査成果が蓄積されている。

とくに本書に掲載した調査区周辺では、複数の自然河川が検出されており、第4図にその配置を示した。作図に当たっては各調査区の調査成果を十分に尊重したが、とくに多肥松林遺跡1次調査区については、例えば、弥生時代後期中葉溝SD07は古墳時代前期以降の可能性を、西2区とⅪ区で検出された弥生時代前期溝SD01は、両調査区で各々別の溝である可能性をそれぞれ考え、縄文時代晩期の流路とされるSR101は、包含層とされる弥生時代中期の堆積層をも埋土として、以後古墳時代にかけて堆積、埋没したものとする等、報告書記載の内容について再検討し、周辺の調査成果と齟齬・矛盾のないように改めた上で作図した。本来であれば、報告書の内容を読み替えた箇所やその理由を示すべきであるが、長くなるため割愛し、結果としての図を提示するととどめる。しかし、なお不明な点は多く、SR-CとSR-Dの流路復元は2次調査区の復元案を参考に作図したが、細部については課題が残る。また、多肥



第3図 周辺道路調査区位置図 (香川県教育委員会 2016より一部改変・転載)

遺跡名	回数	調査期間	面積 (㎡)	調査機関	報告書
松林遺跡(塚跡)	1次	1995.5.19～1995.11.8	1,000	高松市教育委員会	1
松林遺跡(宅地造成)	2次	2004.4.1～2004.12	800	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡(塚跡)	1次	1993.4.26～1994.6	17,600	財団法人香川県縄文文化財調査センター	3
多肥松林遺跡(高松土木)	2次	1994.10.1～1995.3.1	5,900	財団法人香川県縄文文化財調査センター	4
多肥松林遺跡(稲遺)	31次	1997.4.1～1997.12.31	7,820	財団法人香川県縄文文化財調査センター	本冊
多肥松林遺跡(高松山御野)	32次	1998.10.1～1999.3.31			
多肥松林遺跡(電話局)	4次	2003.12.1～2004.3.31	2,000	財団法人香川県縄文文化財調査センター	5
多肥松林遺跡(電話局)	5次	2005.11.16～2005.11.28	520	高松市教育委員会	6
日暮-松林遺跡(郡山計画道路)	1次	1993.11.15～1995.9.29	11,600	高松市教育委員会	7
日暮-松林遺跡(済生会)	2次	2002.5.22～2002.7.31	2,200	高松市教育委員会	8
日暮-松林遺跡(農道)	3次	2008.5.12	70	高松市教育委員会	9
日暮-松林遺跡(フィットネスクラブ)	4次	2004.12.1～2005.1.7	800	高松市教育委員会	10
日暮-松林遺跡(共同住宅)	5次	2004.12.11～2004.12.13	124	高松市教育委員会	11
日暮-松林遺跡(商業ホーム)	6次	2004.5.23～2004.5.27	1,500	高松市教育委員会	12
日暮-松林遺跡(事務所)	7次	2006.10.10～2006.10.12	100	高松市教育委員会	13
日暮-松林遺跡(共同住宅)	8次	2006.11.20～2006.12.22	400	高松市教育委員会	14
日暮-松林遺跡(フィットネスクラブ附帯)	9次	2007.3.1～2007.3.27	2,800	高松市教育委員会	15
日暮-松林遺跡(店舗建設)	10次	2005.12.11～2005.12.28	619	高松市教育委員会	16
多肥宮尻遺跡(稲遺)	1次	1997.4.1～1999.9.30	11,210	財団法人香川県縄文文化財調査センター	16
多肥宮尻遺跡(宅地造成)	2次	2004.7.5～2004.7.16	260	高松市教育委員会	17
多肥宮尻遺跡(衣料品販売店舗)	3次	2005.11.21～2005.11.25	180	高松市教育委員会	18
松尾寺遺跡(岡田川流域春日ヶ丘地区)				高松市教育委員会	19

第1表 周辺の調査履歴(香川県教育委員会2016より一部改定・転載)

<報告書一覧>

【松林遺跡】

- 高松市教育委員会1996『香川県立高松南高校周辺遺跡調査に伴う縄文文化財発掘調査報告書 松林遺跡』
- 高松市教育委員会2004a『宅地造成工事に伴う縄文文化財発掘調査 松林遺跡(第2次調査)』

【多肥松林遺跡】

- 財団法人香川県縄文文化財調査センター1999『高校新設事業に伴う縄文文化財発掘調査報告書第1冊 多肥松林遺跡』
- 高松市教育委員会2016『高松土木事務所新設に伴う縄文文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡』
- 香川県縄文文化財センター2005『高松山御野警察移転整備事業に伴う縄文文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡』『香川県縄文文化財調査センター年報』平成15年
- 高松市教育委員会2006a『多肥松林遺跡(電話局)』『電話局建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書』

【日暮-松林遺跡】

- 高松市教育委員会1997『都市計画道路福多肥上町線建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書 日暮-松林遺跡』
- 高松市教育委員会2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 日暮-松林遺跡(済生会)』
- 高松市教育委員会2005a『日暮-松林遺跡(農道)』『高松市内遺跡発掘調査情報-平成15年度国庫補助事業-』
- 高松市教育委員会2005b『フィットネスクラブ建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書 日暮-松林遺跡(フィットネスクラブ)』
- 高松市教育委員会2005c『日暮-松林遺跡(共同住宅)』『高松市内遺跡発掘調査情報-平成15年度国庫補助事業-』
- 高松市教育委員会2005d『日暮-松林遺跡(済生会特養ホーム)』
- 高松市教育委員会2007a『日暮-松林遺跡(事務所建設)』『高松市内遺跡発掘調査情報-平成18年度国庫補助事業-』
- 高松市教育委員会2007b『日暮-松林遺跡』『共同住宅建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書』
- 高松市教育委員会2016『店舗建設工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 日暮-松林遺跡 -第10次調査-』

【多肥宮尻遺跡】

- 香川県教育委員会2017『国道太田町志度線道路改良工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡』
- 高松市教育委員会2004b『宅地造成工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡』
- 高松市教育委員会2006b『衣料品販売店舗建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡(衣料品販売店舗)』

【その他】

- 高松市教育委員会1999『讃岐国弘福寺跡の調査』『第2次弘福寺遺跡(岡田山)郡田遺跡調査報告書』

【多肥北原遺跡】

- 香川県教育委員会2012『国道太田町志度線道路改良工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥北原遺跡』

【多肥平塚遺跡】

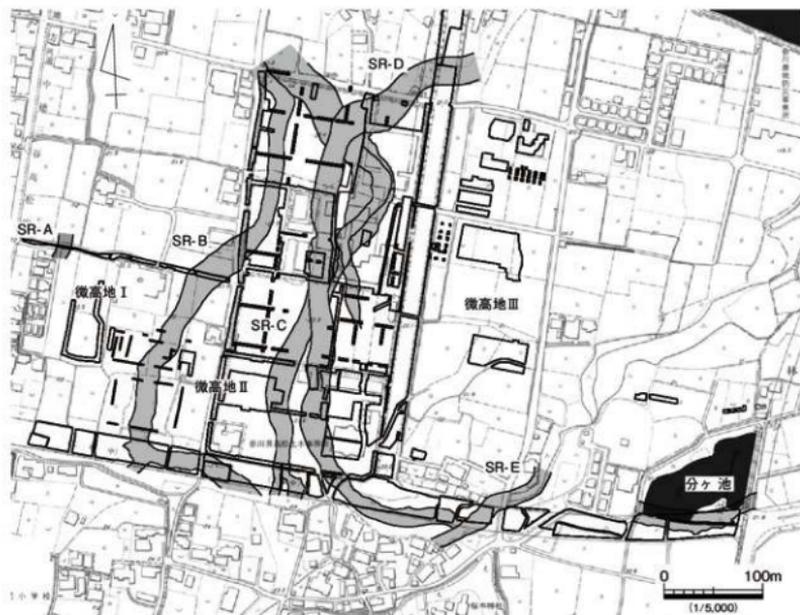
- 香川県教育委員会2013『国道太田町志度線道路改良工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥平塚遺跡』

【多肥北原西遺跡】

- 香川県教育委員会2015『国道太田町志度線道路改良工事に伴う縄文文化財発掘調査報告書 多肥北原西遺跡』

宮尻遺跡1次調査区については、本書執筆時に正式報告書が未刊のため、一部省略した。

第4図に示したように、本遺跡周辺は、概ね5条の自然河川が大きく蛇行を繰り返し、互いに合流、分岐を重ねながら概ね北へ流下している。自然河川の堆積時期は、SR-Bや多肥宮尻遺跡1次調査区SR02から、縄文時代晩期の遺物が出土し、これらの流路が最も古く位置付けられる。しかしながら、各流路の主体をなすのは、弥生時代中期中葉～古墳時代前期前葉であり、その前半期に水成堆積層により埋没した後、低湿地状を呈して穏やかに埋没し、古墳時代後期頃には概ね平準化されていた可能性が、各次調査によって明らかとなっている。そして、これら流路間には、南北に細長い不整な短冊状の微小



遺跡名	松林遺跡		多肥松林遺跡					日暮・松林遺跡		多肥宮尻遺跡
	1次		1次	2次	3次	4次	5次	1次	1次	
SR-A	NR-02									
SR-B	NR-02	SR101			SR01・02		田河道	SR01		
SR-C		SR01 (SR02)	SR04	SR03・04	SR01					
SR-D		SR02 (SR01)	SR03	SR05					SR01	
SR-E									SR02	

第4図 自然河川の分布と各遺跡の遺構名の対応関係 (高松市都市計画図「太田」を50%に縮小し、一部加筆して掲載)

地群が東西に並列する。それらを西より順に、微高地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼称する。これら微高地群が、弥生時代以降の生活の舞台となる。

本書では、上述した各自然河川について、個別調査区でのSR01、SR02…といった名称とともに、流路全域を指す名称として上記したSR-A、SR-B…との名称を使用する。またこれら自然流路によって画された微高地の名称も、上記した名称を使用することとする。

補註

註1 多肥平塚遺跡では、13～14世紀前半代の多数の柱穴群が検出されているが、明確な建物遺構は確認されていない。小規模な屋敷地が存在した可能性は高いが、屋敷地内部の構造等は不詳である。

引用・参考文献

- 香川県教育委員会 2003『香川県中世城館詳細分布調査報告』
 川野正彦・武田明 1989『日本歴史地名体系第38巻 香川県』、平凡社
 木原博幸 1988『氏族の分布』『古代の遺跡』、美巧社

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

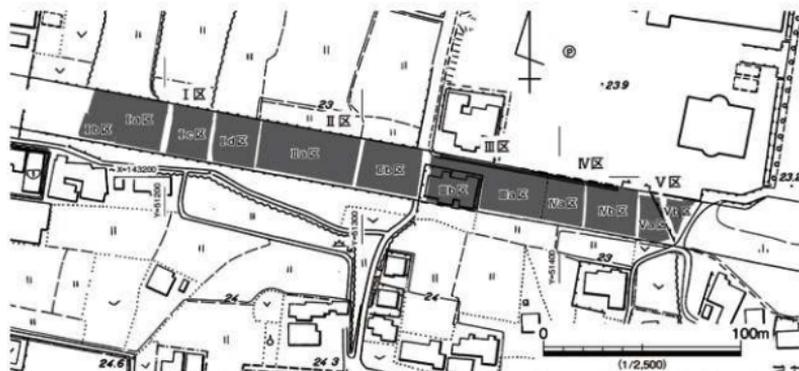
調査対象地は、県道予定地であるため、南北幅約25m、東西延長約310mと東西に細長い。また、田園地帯であるため、調査地内を用水路や農道が南北に縦断する。したがって調査区は、現状での地割りを基準に、第5図に示すように西よりⅠ～Ⅴ区に区分し、さらに調査時の工程等により、各区を2～4の小区画に分割して、調査を実施した。各区の名称は、小区画名を西よりa・b・c…と変更した以外は、調査時のものを踏襲した。なお、調査前の地目は、水田などの耕作地と宅地である。

平成9年度の調査は、掘削及び仮設工事を業者に委託する工事請負方式で、平成10年度は、直営方式によりそれぞれ実施した。いずれも基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力による掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置し、平面図も業者に委託して航空写真測量により図化を行った。それ以外の土層断面図や遺物出土状況図等は、調査員が実測・図化した。

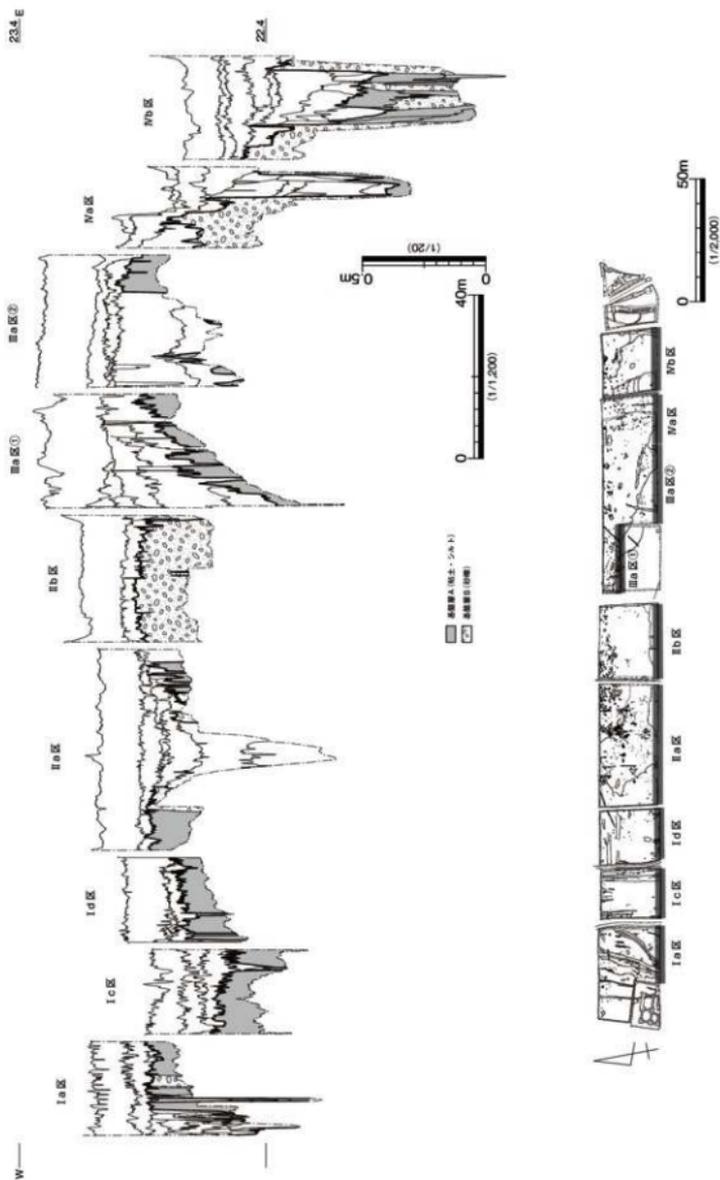
包含層等出土の遺物は、調査対象地全体を日本測地系の国土座標に従い、20m四方のグリッドを設定して、グリッド毎に取り上げた。また、重要な遺物については、写真撮影等により記録した。遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を与えて統一した。なお、遺構の性格を示す遺構略号は、土坑SKの一部が建物柱穴SPとなったもの等、明確なものを除いては、調査時の所見を尊重してそのまま使用した。

第2節 基本層序

表土層以下の調査地の堆積層については、調査区壁面の層序を記録した。土色名や土壌の種類については、記録のまま記載した。したがって、調査年度により同一と考えられる土層について、記載の相違が認められる。また、記録上は同一土層であっても、位置により他の層位との層序関係の逆転等の混乱



第5図 調査区割図 (高松市都市計画図「太田」に一部加筆して掲載)



第6図 基本土層図

Ic区北壁土層断面図



23.0m



- 1 瓦葺土
- 2 灰吹砂層土 (埋内土)
- 3 灰吹砂層土 (埋外土)
- 4 埋内砂層土 (埋外土)
- 5 灰吹砂層土 (埋内土)
- 6 埋内砂層土 (埋外土)
- 7 埋内砂層土 (埋内土)
- 8 埋内砂層土 (埋外土)
- 9 埋内砂層土 (埋内土)
- 10 埋内砂層土 (埋外土)
- 11 埋内砂層土 (埋内土)

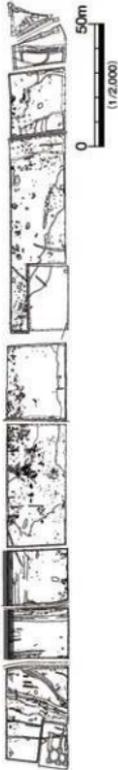
Ic区進入部北壁土層断面図



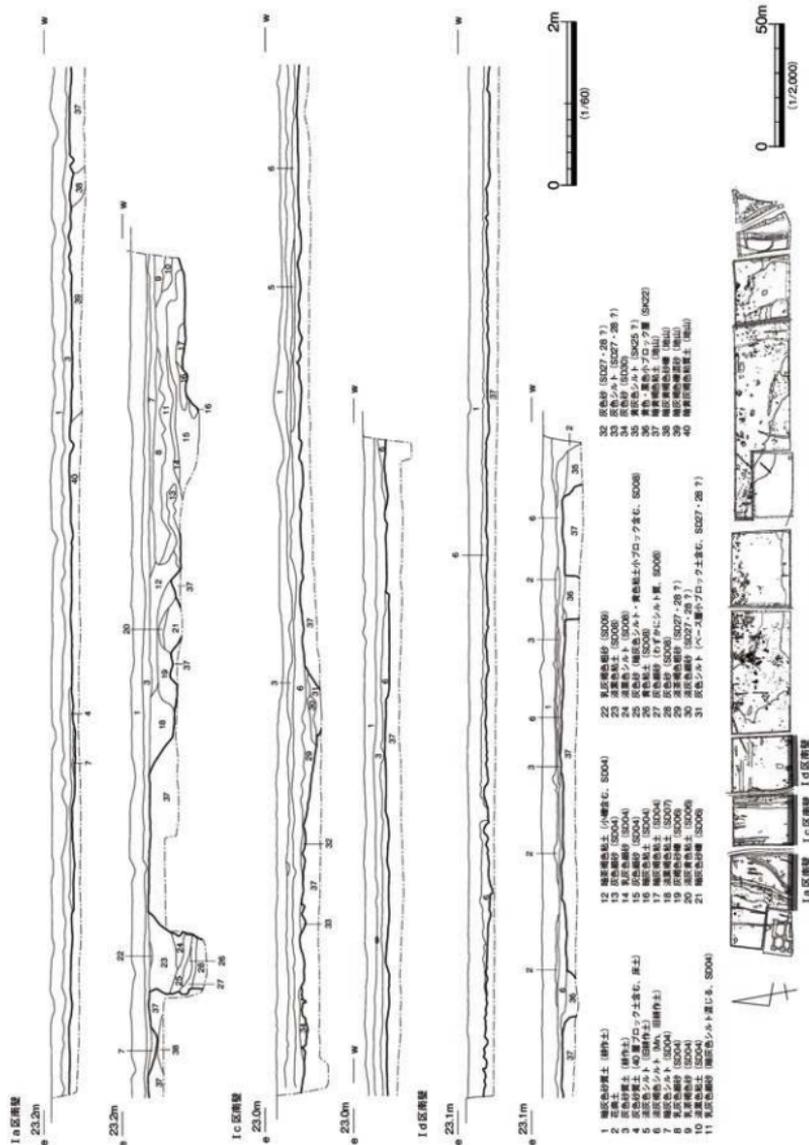
23.2m



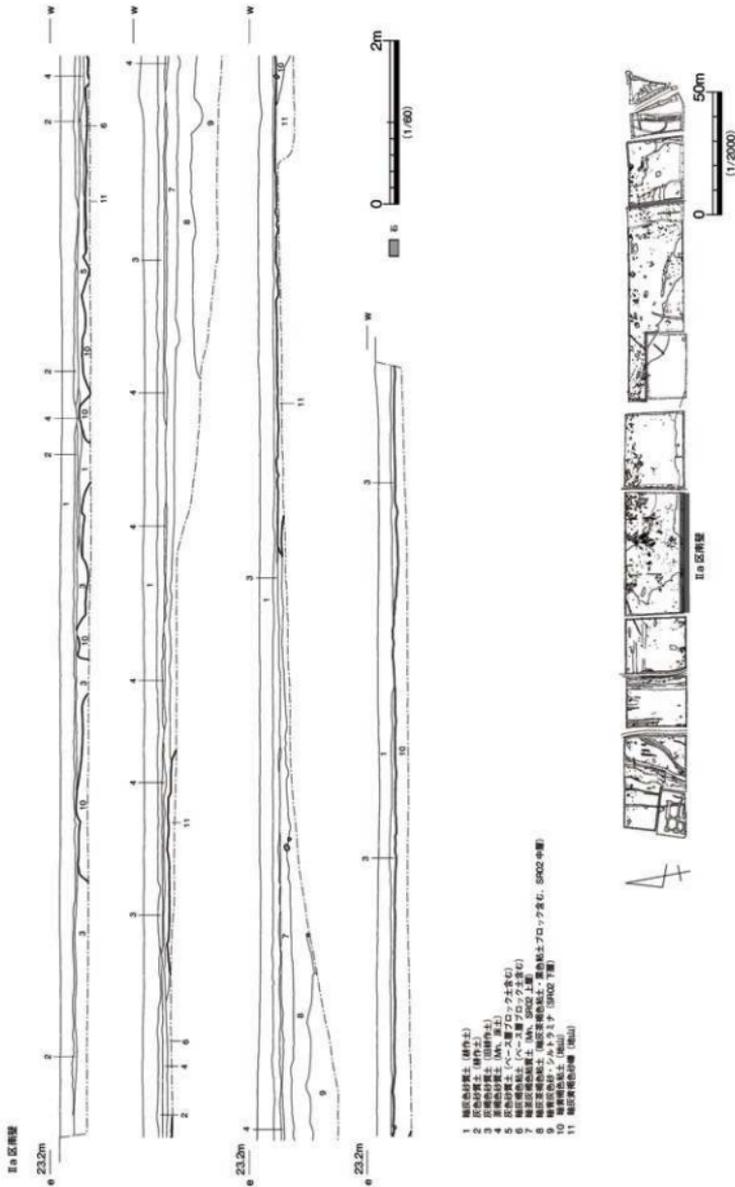
Ic区北壁 Id区北壁



第7図 Ic区・Id区北壁断面図



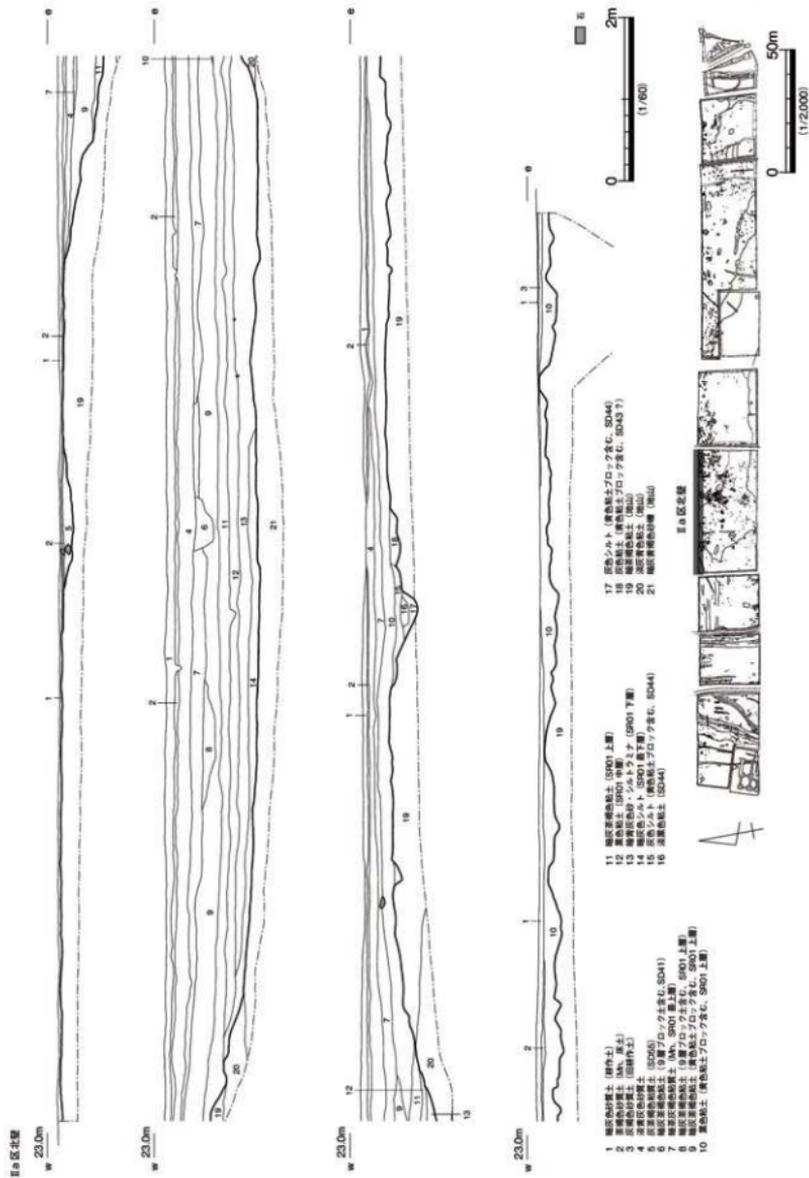
第8図 I 区南壁土層断面図



第9図 II a 区南壁土層断面図



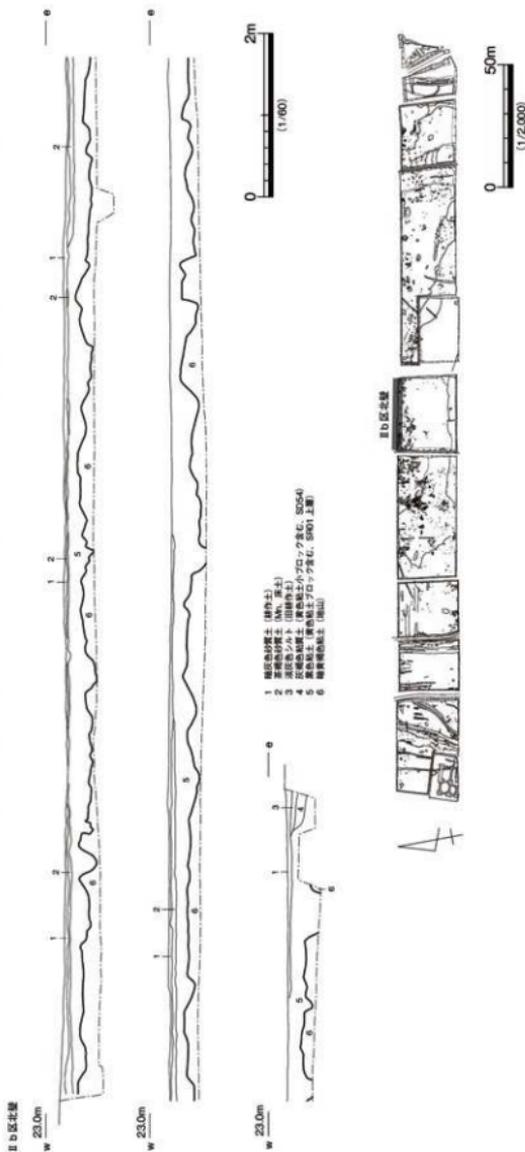
第10図 IIa区東壁土層断面図



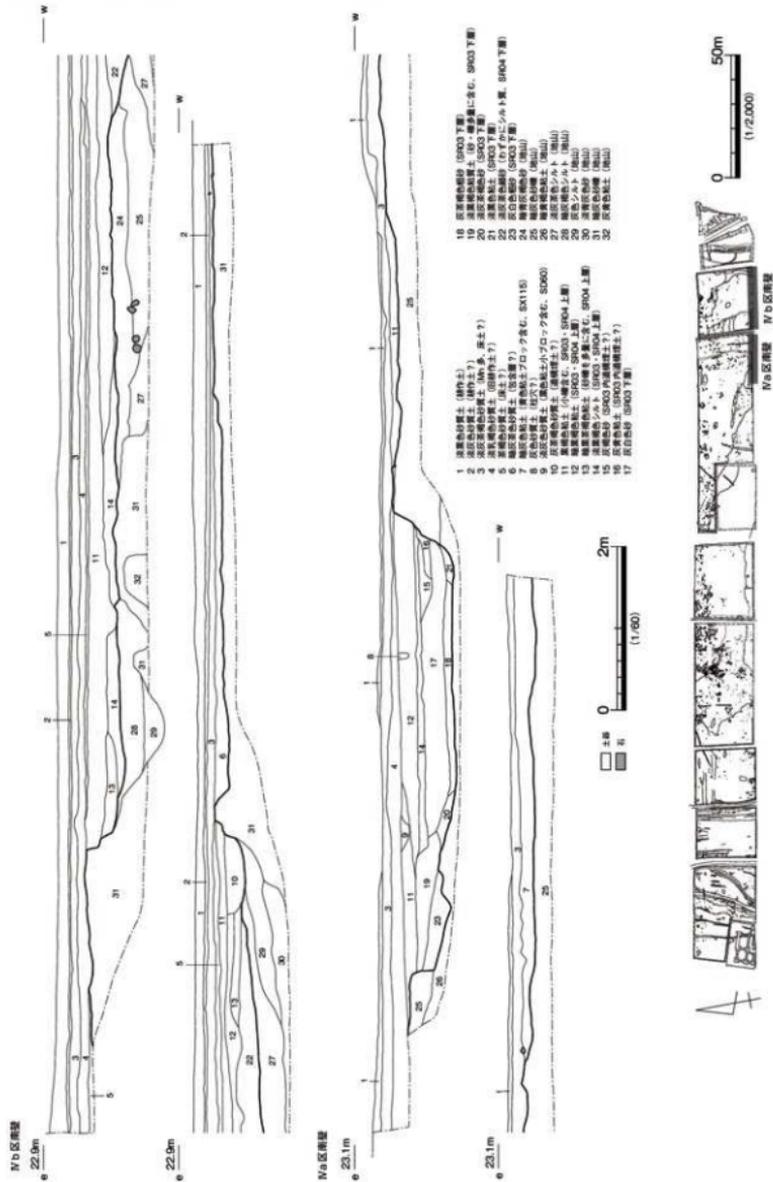
第 11 図 II a 区北壁土層断面図

がまま認められたが、これらについても、事実の確認が不可能なため、修正せずそのまま掲載した。

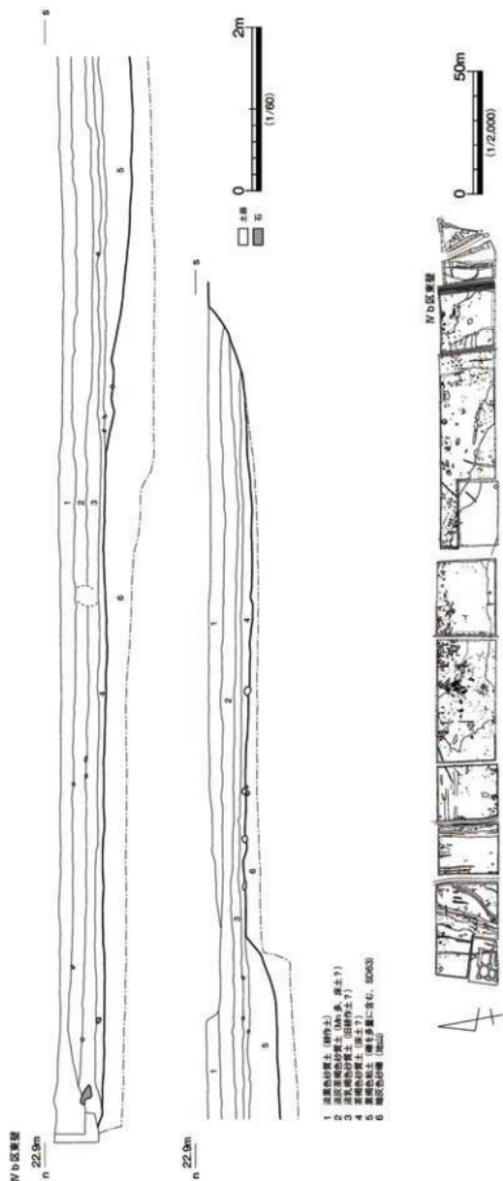
各調査区は、調査前には水田等の耕地や宅地として利用されていた。宅地造成に伴う造成土や近・現代以降の耕作土・旧耕作土・床土層等を取り除くと、地山層である褐色系粘土や砂礫(第6図基盤層A・B)が露出し、本層をベースとして弥生時代以降の遺構が検出された。いくつかの調査区で、近・現代の耕土層と地山層との間に、堆積層が記録されている(例えば、Ⅱb区南壁4層等)が、それら堆積層の内容・性格についての記録がなく、中世以前の包含層であるのか近世以降の旧耕土層の一部であるのか判断できなかつた。したがって、局地的に削奪を免れた近世以前の堆積層が残存している可能性は否定できない。調査では、それら堆積層を含めて、ベース層上面のレベルまで重機で掘り下げて遺構の検出作業を行っており、自然河川堆積層中を除いて、複数面の遺構面の存在は確認されていない。なお、ベース層の堆積時期については、近接する空港跡地遺跡Ⅱ-10区自然流路内より出土した自然木の放射性炭素年代測定において、 $8,130 \sim 8,120 \pm 105$ y B.P.といっ



第12図 Ⅱb区北壁土層断面図



第16図 IVa区・IVb区南壁断面図



第17図 IVb区東壁土層断面図

た測定値が得られ（香川県教育委員会・叻香川県埋蔵文化財調査センター1996）、また大池遺跡からは有舌尖頭器が出土していることから、縄文時代草創期～前期に求められよう。

各調査区遺構面の標高は、I区が226～229 m、II区が227～229 m、III区が23.0～23.1 m、IV区が22.2～22.4 m、V区が22.2 m前後であった（第6図）。概ね東に緩やかに傾斜し、SR03～SR05が流下するIV・V区が低く、弥生時代の竪穴建物や古代～中世の掘立柱建物が出検されたIII区東部～IV区西部が、相対的に高い位置で遺構が出検された。SR01とSR03に挟まれた範囲に、狭小な微高地が展開し、弥生時代以降生活域として利用されたと考えられる。また、自然河川が認められなかったI区は、Ic・Id区を中心に、自然河川の所在するII区とさほど変わらない高さで遺構が出検された。両調査区では溝を主体とした遺構が出検され、また遺構の残存深も浅いことから、後世に地下げ等により、遺構面が大きく削奪された可能性が考えられる。

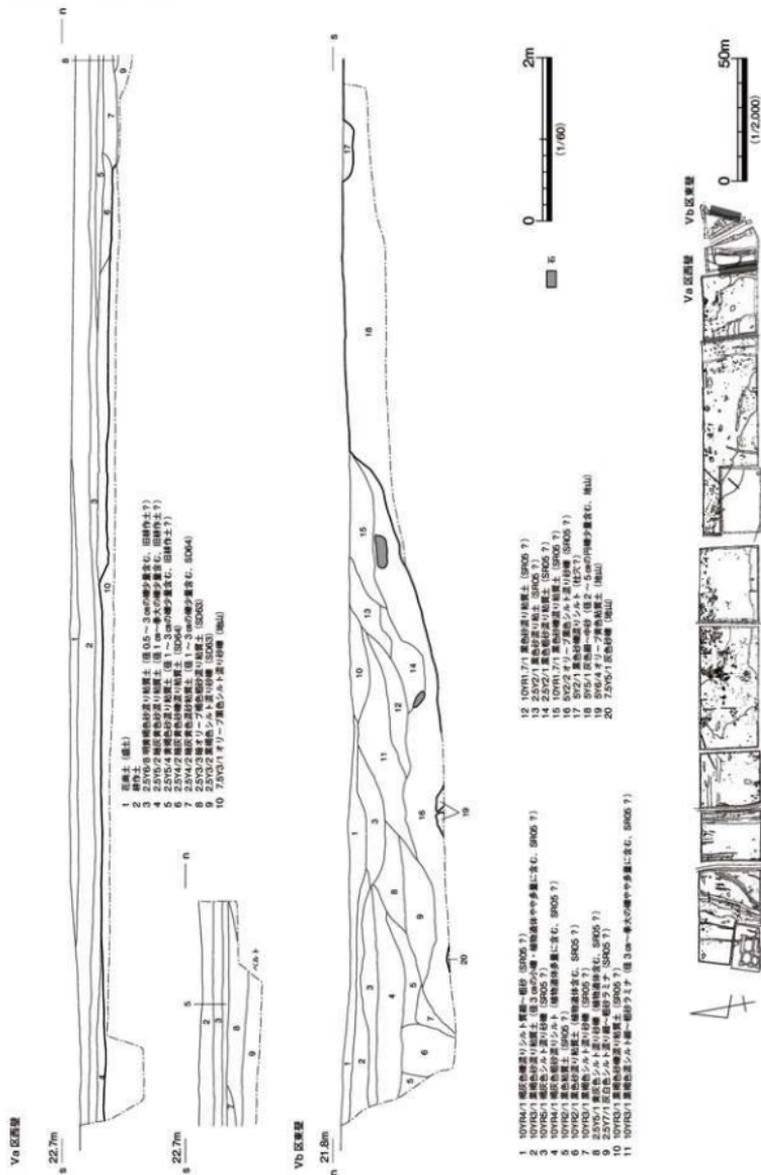
第3節 遺構・遺物

弥生時代

竪穴建物

SH01（第21図）

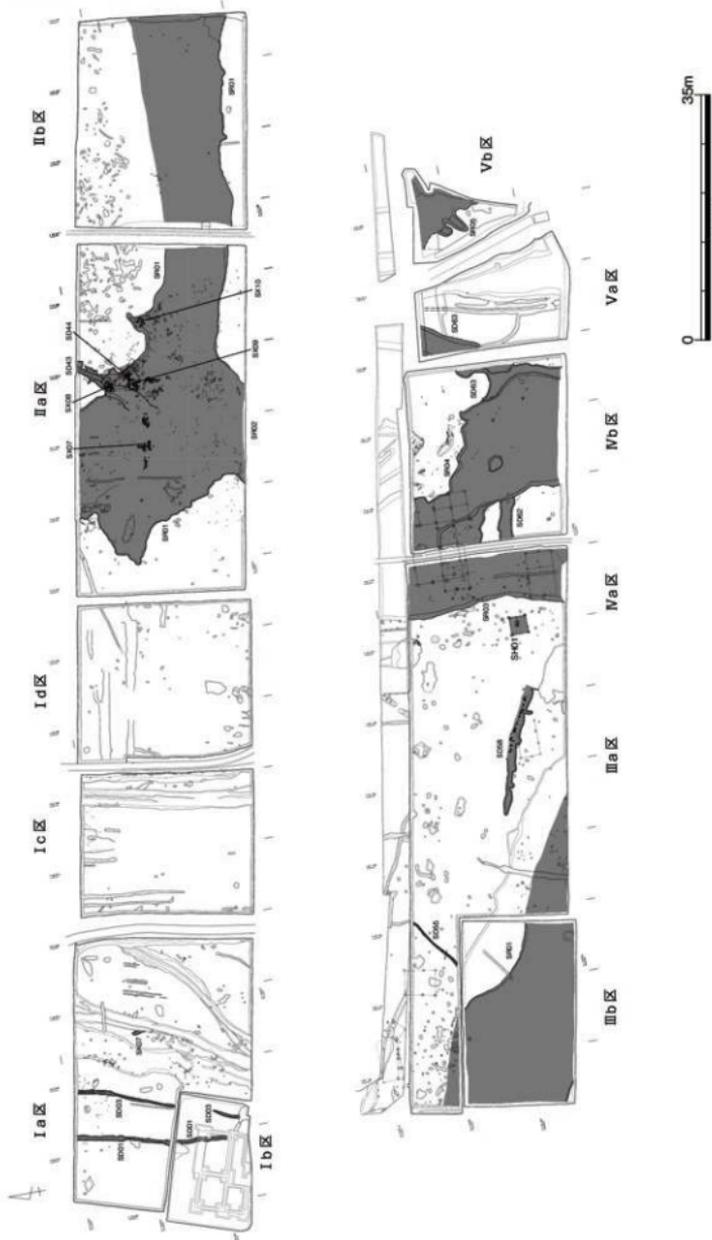
IVa区南西隅で検出した竪穴建物である。建物掘り方は削奪され、



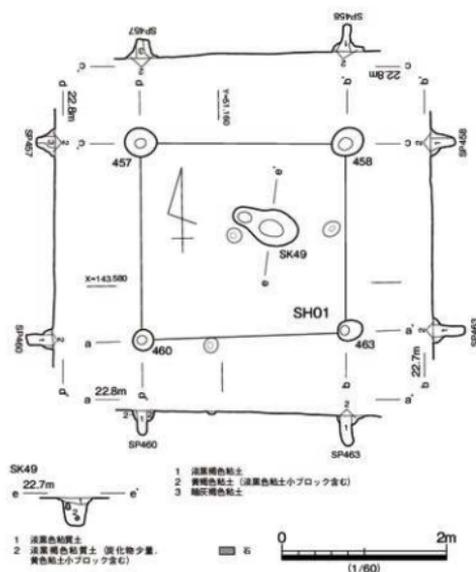
第18図 Va区西壁・Vb区東壁土層断面図



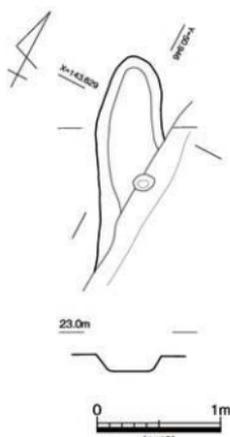
第19図 Va区・Vb区北壁土層断面図



第20図 弥生時代遺構配置図



第21図 SH01 平・断面図



第22図 SK07 平・断面図

規模や形状は不詳だが、ほぼ矩形に配された柱穴配置とその内部に位置する中央土坑 (SK49) より、堅穴建物として報告する。主柱穴は4基で、柱間は東西約2.5m、南北約2.3mに配される。各柱穴は、長径0.3~0.4mの平面円ないし楕円形を呈し、残存深0.3~0.4mであった。またすべての柱穴で、径約0.15mの柱痕を検出した。中央土坑は、主柱穴内の中央やや北東寄りで見出した。平面形は、長軸0.82m、短軸0.44mの歪な楕円形を呈し、底面形状からも複数遺構が重複している可能性が考えられる。残存深は、0.34mと主柱穴に近似した深さまで掘り込まれており、短軸方向の断面形も箱形を呈し、中央土坑としてやや違和感がないわけではない。埋土は2層に細分され、下位層に少量の炭化物とブロック土を含む。

遺物は、中央土坑より弥生土器甕等の小片5点が出土したのみで、炭化可能な遺物は出土していない。中央土坑の炭化物試料は採取されていないため、放射性炭素年代測定等の理化学的分析は行えなかった。出土遺物に、香東川下流域産土器が含まれることや、周辺より後期前半期の遺構・遺物の出土が乏しいことから、弥生時代後期後半~古墳時代前期前葉の遺構の可能性を考える。

土坑

SK07 (第22図)

I a区中央部で見出した土坑である。南半部をSD06に切られ、全形は不詳である。長軸1.3m以上、短軸約0.6mを測り、平面形は南北に長い長楕円形ないしは歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.15mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土に関する情報は記録されていない。

遺物は弥生土器甕等の小片6点が出土したのみである。出土遺物が乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。SD06より先行し、弥生時代以降の遺物が出土していないことから、当該時期の遺構として報告する。

溝

SD01 (第23図)

I a・I b区で検出した南北溝である。南端建物基礎の攪乱付近で東へ屈曲し、平面L字状を呈し、南北両端は調査区外へ延長する。検出長約27.0mで、切り合い関係よりSD03より後出する。北半部は概ねN 13.45° Eに直線状に配され、検出面幅0.4～0.6m、残存深0.14～0.16m、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は、北端部で22.63mを、南端部で22.71mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は1～2層に分層され、褐色系の砂質～粘質土の堆積が記録され、弱水流下の自然堆積の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕等の小片4点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、出土遺物と埋土から判断して、当該時期の遺構として報告する。

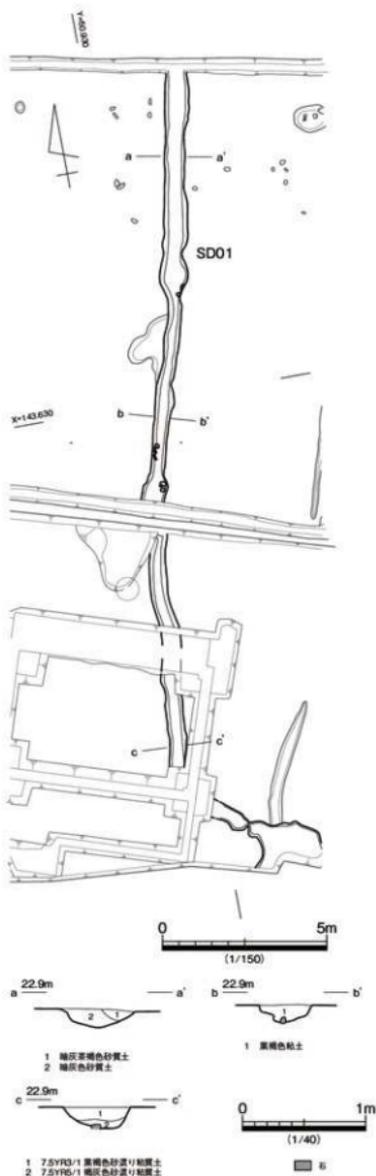
SD03 (第24図)

I a・I b区で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、南半部は遺構面の削平により一部途切れるが、流路方向や埋土の特徴より同一溝と判断した。また南端部で、SD01に切られる。延長約23.3mを検出した。やや屈曲するが、流路方向は概ねN 18.9° Eに配される。検出面幅0.3～0.5m、残存深0.07～0.11m、断面形は概ね皿状を呈する。底面の標高は、北端部で22.64mを、南端部で22.76mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は1～2層に細分され、灰色系の砂質～粘質土が堆積していた。

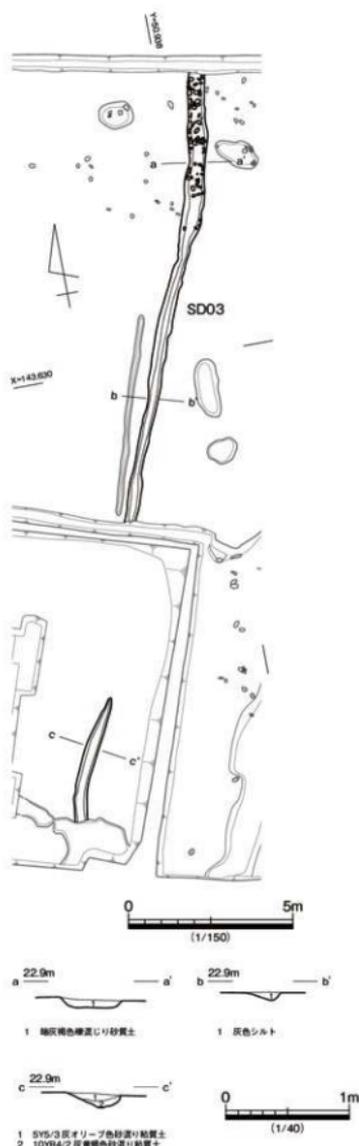
遺物は、器種不詳の弥生土器小片が2点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、出土遺物と埋土から判断して、当該時期の遺構として報告する。

SD43・SD44・SX08 (第25・26図)

SD43は、II a区中央北半部SR01上層下面、ベース層上面で検出した南北溝である。北端は調査区外



第23図 SD01 平・断面図

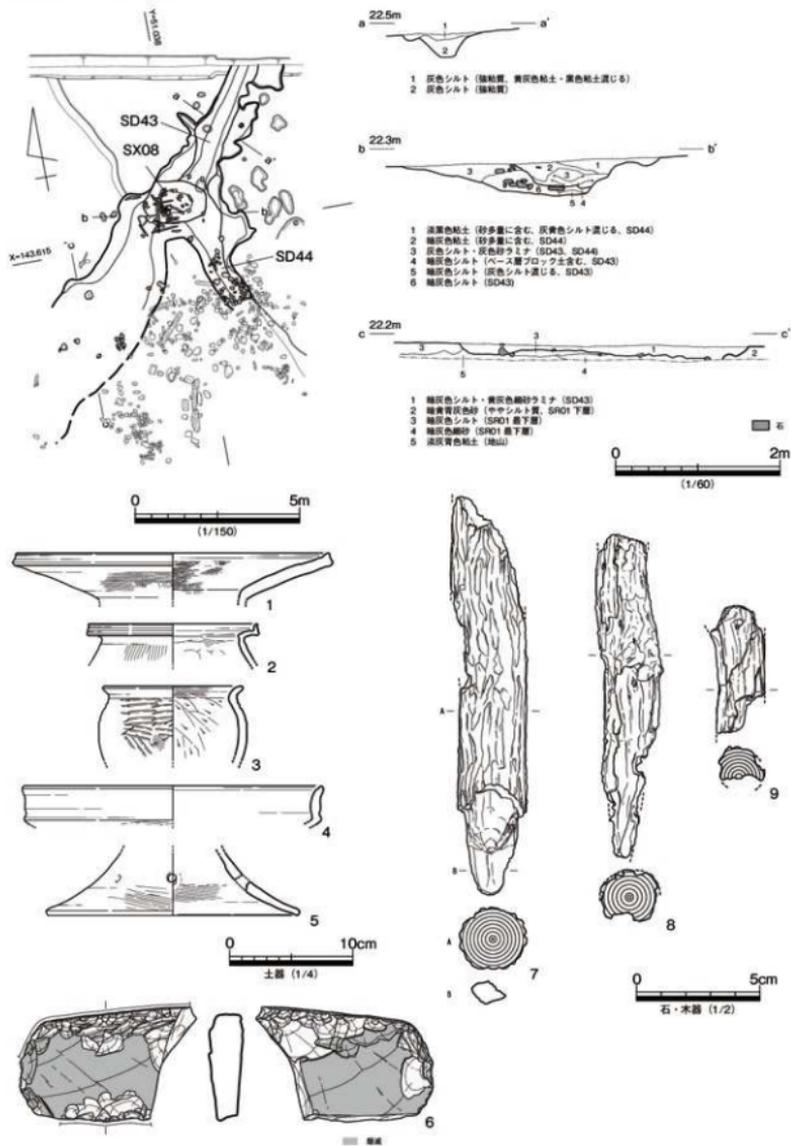


第24図 SD03平・断面図

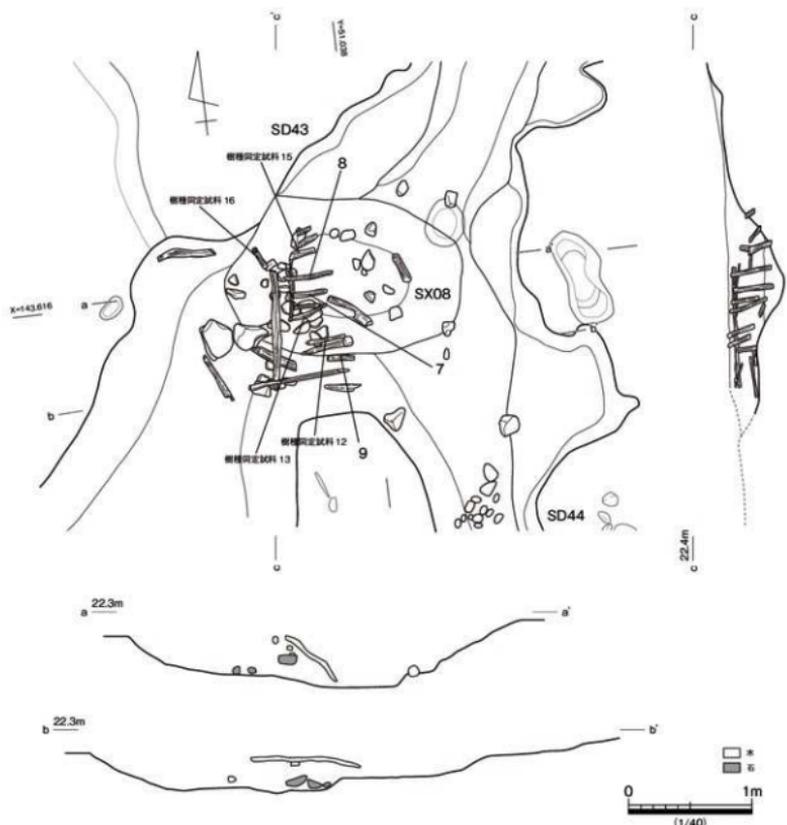
へ延長し、南端は調査区内で途切れ、約9.0mを検出した。中央付近で南よりSD44が合流する。流路方向N39.44°Eに配され、検出面幅0.7～2.1m、残存深0.12～0.20mで、断面形は概ね浅い逆台形状を呈し、底面に細かな起伏を伴う。流路底面の標高は北端部で22.17m前後、南端部で21.90m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下し、後述するSR01へ合流していた可能性が考えられる。SR01と本溝との合流部の詳細については不詳であり、SR01流路中央部へ向けて本溝が延長する可能性が記録される。後述する出土遺物から、SR01下層堆積層と概ね同時期に位置付けられるが、層位的な関係は記録されていない。埋土は北半部で2層に細分されているようだが、後述するSD44埋土とは異なり、後述する堰SX08設置時期と埋土の堆積時期との関係は、調査記録からは明らかにはできない。

SD44は、SD43と内角56.8°で斜交して合流する南北溝で、南端はSR01に合流する。SD43との合流部付近でやや東側に大きく膨れるが、溝南半部の平面プランや土層図の形状から、重複した別遺構を本溝として掘り下げた可能性が考えられる。検出面幅約0.80m、残存深0.34m前後を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は3層に細分され、下位にはシルトと砂のラミナによる水成堆積層が確認された。

SD44との合流部西側で、堰SX08を検出した。SX08はSD43の流路方向と内角約38.2°と斜交して横木を渡し、その上流側東面に11本以上の木杭を設置した構造物をもち、南北延長約1.3mと、ややくびれたSD43の溝幅ほはいっぱいに設置されていた。木群西側には、拳大～人頭程度の複数の礫群の出土が確認され、土層図には明確に示されていないものの、こうした礫と土砂を盛り上げてSD43に土堤を構築し、堤を補強するため、その前面に木杭と横木を設置したものと考えられる。大半の木杭下端は、ベース層に達しておらず、溝埋土中で検出されたことから、調査記録からは明らかにはできないが、木杭は横木の上面に据え並べられたものと考えられる。他の遺跡での調査例より、木杭の前面にはさらに被覆材や盛土により、補



第 25 図 SD43・SD44 平・断面・出土遺物実測図

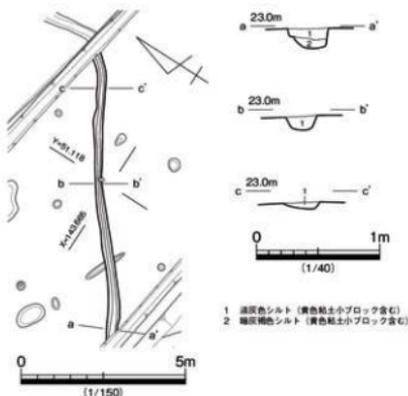


第26図 SX08 平・断・立面図

強されていた可能性が高い。設置位置や構造から、SD43を流下する用水を堰き止め、SD44へと導水していたものと考えられる。SD43の流路方向と斜交して堰が配されたのは、SD43の水流による攻撃面をより広く設定することで、浸食による堰SX08の損壊を減少させる工法上の意図があったものと考えられる。なお、堰SX08は検出面直下で検出され、より上位の構造については不詳であり、下流側の調査記録も詳細を欠き、SD43を完全に塞いでSD44へと流路を変更しようとしたものか、堰SX08上方の溢流を利用して、SD43とSD44の流量を調節しようとしたものかは判断できなかった。

また、SD43・SD44南側のSR01埋土中からは、SX08と近似した大きさの多量の礫が出土し、SX08と近似した方向に配された木群SX09が検出されていることから、SX08とSX09が一連の遺構であり、SR01に伴う堰の可能性も想定された。しかし、SX08とSX09は、その構造面において大きく相違し、それぞれ別遺構として報告する。

概報(香川県教育委員会・師香川県埋蔵文化財調査センター1998)では、SD43はSR01より取水して北東方へ流下する利水施設であり、取水位置の変更によりSD44が開削され、それに伴い堰SX08が構築されたことを記述するが、そうした場合SD44の水流による攻撃面はSD43北壁となり、SX08設置の意味が不明瞭となり、既述した溝底の高低差とも矛盾するため、本報告では改める。取水位置をわずか数m上流側へ移動させる意図も明らかではない。しかし、SR01への導水を想定した場合についても、各溝とSR01との合流部の様相が不明なため、各溝開削の目的については明らかにはできない。後述するSR01の埋土等より、当時水田



第27図 SD55 平・断面図

等としてSR01周辺が開発されていた可能性が想定されるが、土壌分析はなされておらず、試料も採取されていない。このため、調査記録を提示するにとどめる。

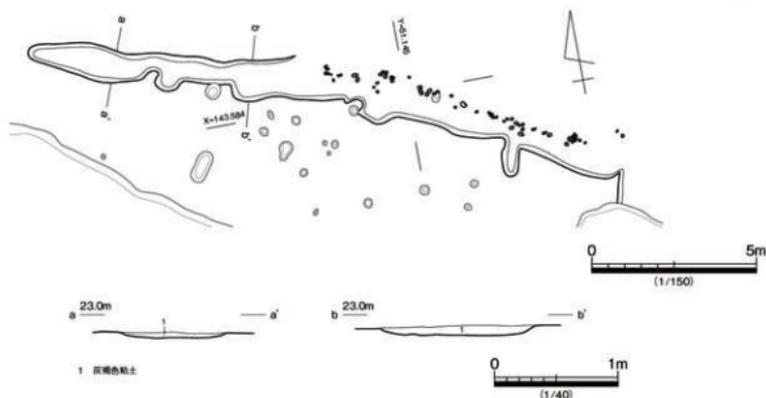
遺物は、弥生土器甕・高杯等の破片が30点程度出土した。2は弥生土器甕。中期末～後期前葉に遡り、混入資料と考える。1は同広口壺、4・5は同高杯の杯部と脚部の小片で、いずれも胎土中に角閃石粒を含み、香東川下流域産土器である。3は多量の雲母粒を含む小型甕で、高松平野周辺部で製作された可能性がある。出土遺物より、弥生時代終末期新相を前後する時期の遺構と考えられるが、遺物の詳細な出土位置や層位は記録されておらず、堰SX08の構築時期等については、出土遺物からも明らかにはできない。

6は、背部に自然面を有するサヌカイト製の楔形石器で、表表面には強いマメツ痕を認め、打斧の転用の可能性を考える。7～9は木杭である。木杭等の木製品は、挿図に示すように多量に出土しているが、検出から取り上げまでに時間を要し、その間に出土木製品の大半は乾燥により劣化したためか、回収されていた木質遺物は6点に限られる。また、木杭9のように、乾燥により加工部が破砕された資料も4点認められる。3点を図示したが、上記の理由からいずれも加工痕は不明瞭である。樹種同定の結果、クスギヤコナラが利用されていることが判明し、当該期の遺跡周辺には広葉樹林が分布していた可能性が考えられる。

上述した課題より、堰SX08出土の木杭4点について、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章を参照されたい。分析の結果、暦年較正年代の中央値はcalAD291～388が示され、若干のバラツキがみられるものの概ね古墳時代前期、試料No.2をとれば4世紀後葉に採掘された可能性を示している。溝より出土した土器資料の想定年代との間に時期差を認め、これを上記した溝SD43の改修と結び付けて理解するなら、SD43は弥生時代終末期に開削され、古墳時代前期までに埋設し、その後改修によりSD43が再開削され、堰SX08が設置された可能性が高いと考える。

SD55 (第27図)

Ⅲa区北西部で検出した溝で、2次調査Ⅲ-3区SD08(香川県教育委員会2016)より連続する東西



第28図 SD58平・断面図

溝である。西端は調査区境で途切れ、Ⅲb区で延長が確認されず、おそらくSR01に合流するものとみられるが、合流部が調査区境となり、SR01との関係は不明である。流路方向N 54.16° Eに配され、検出面幅0.25～0.33 m、残存深0.05～0.16 mで、断面形は浅い皿状ないし箱形を呈する。流路底面の標高は、22.82 m前後ではほぼ平坦で、流下方向は不明である。埋土は2層に細分され、灰色系シルトが堆積する。いずれもベース層のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

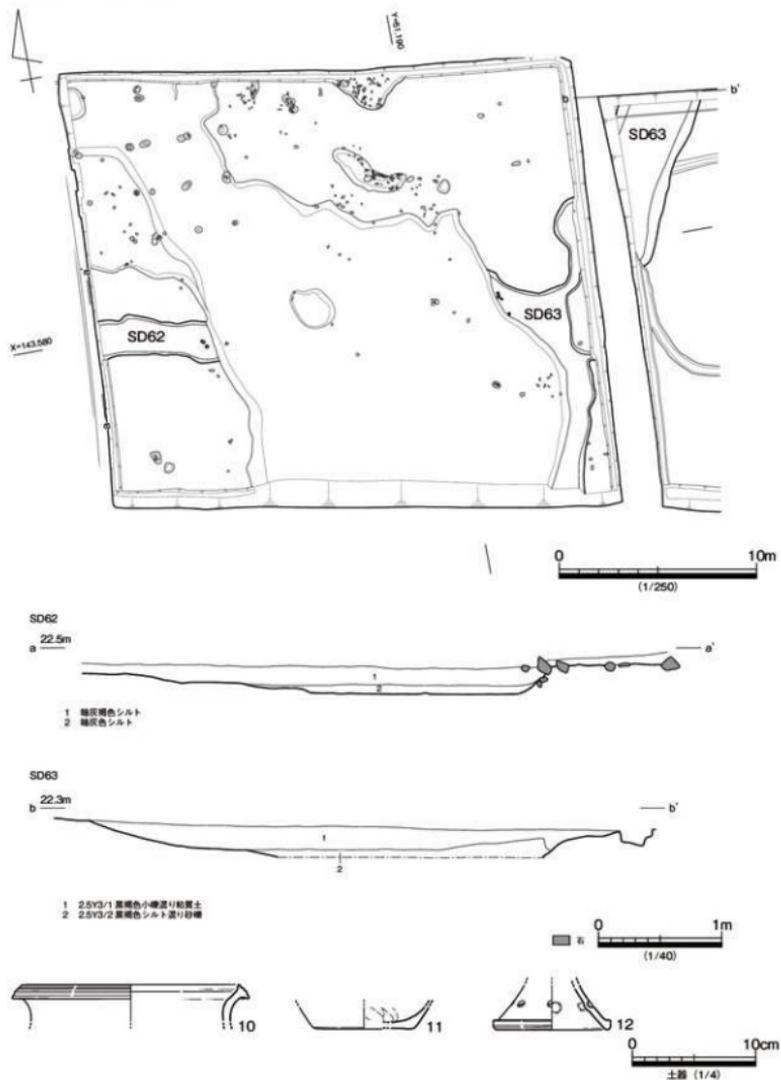
遺物は、弥生土器小片が30点程度出土した。2次調査の報告書では、出土遺物より弥生時代中期中葉の年代が想定されているが、今次調査区の遺物には、香東川下流域産土器の小片が少量ながら含まれることから、弥生時代後期後半～終末期を上限とする遺構と考えられる。

SD58 (第28図)

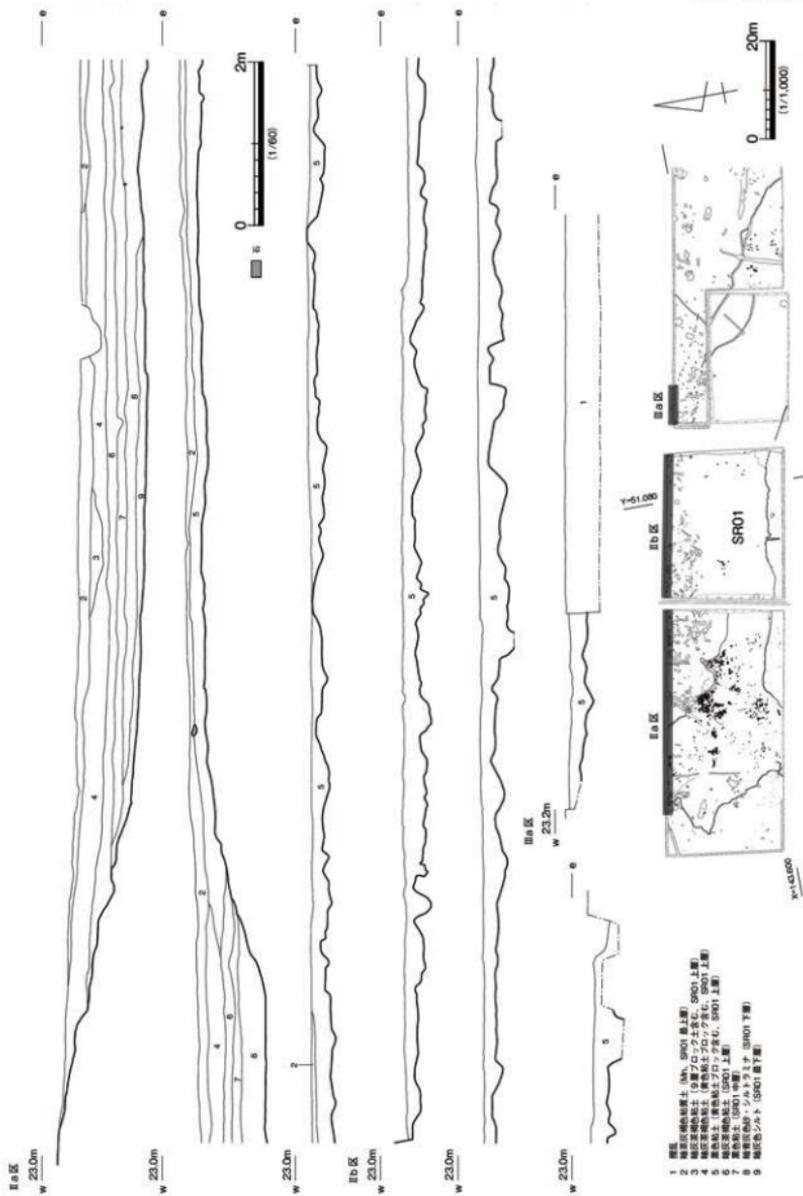
Ⅲa区中央～東半部で検出した東西溝である。東半部は遺構面の削平のため掘り方北肩が確認できていない。また掘り方北肩が消失する部分を境に、東と西で流路方向が異なり、東半部はN 60. 24° Wに、西半部はN 74.87° Wにそれぞれ配される。東西両端は調査区内で途切れるが、西延長上に2次調査Ⅲ-3区溝SX10(香川県教育委員会2016)が位置し、一連の遺構であった可能性は高いものと判断する。埋土に関する情報は記録されておらず、また遺物も出土していない。Ⅲ-3区SX10と一連の遺構との前提で、弥生時代後期～終末期の遺構として報告する。

SD62・SD63 (第29図)

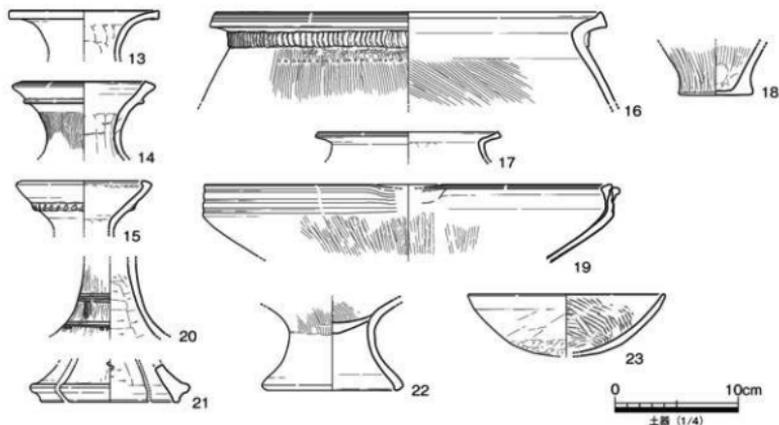
Ⅳb区東端よりⅤa区北西隅にかけて検出した、北東流する溝である。平面的にはⅣ区SR04に先行する遺構として調査されているが、調査区南壁の土層断面の記録では、本溝に該当する土層の記載はなく、正確なSR04との重複関係については不詳である。平面図の調査記録より、SR04に先行する遺構として報告する。流路方向N 22.97° Eに配され、北端は調査区外へ延長して、2次調査Ⅳ-2区SD13に連続する。調査時には自然河川として調査がなされていたようだが、Ⅴ区で流路がほぼ直線状に配されること、後述するように遺物に顕著な時期幅が認められないことから、溝として報告する。検出面幅



第 29 図 SD62・SD63 平・断面・出土遺物実測図



第30図 SR01 断面図

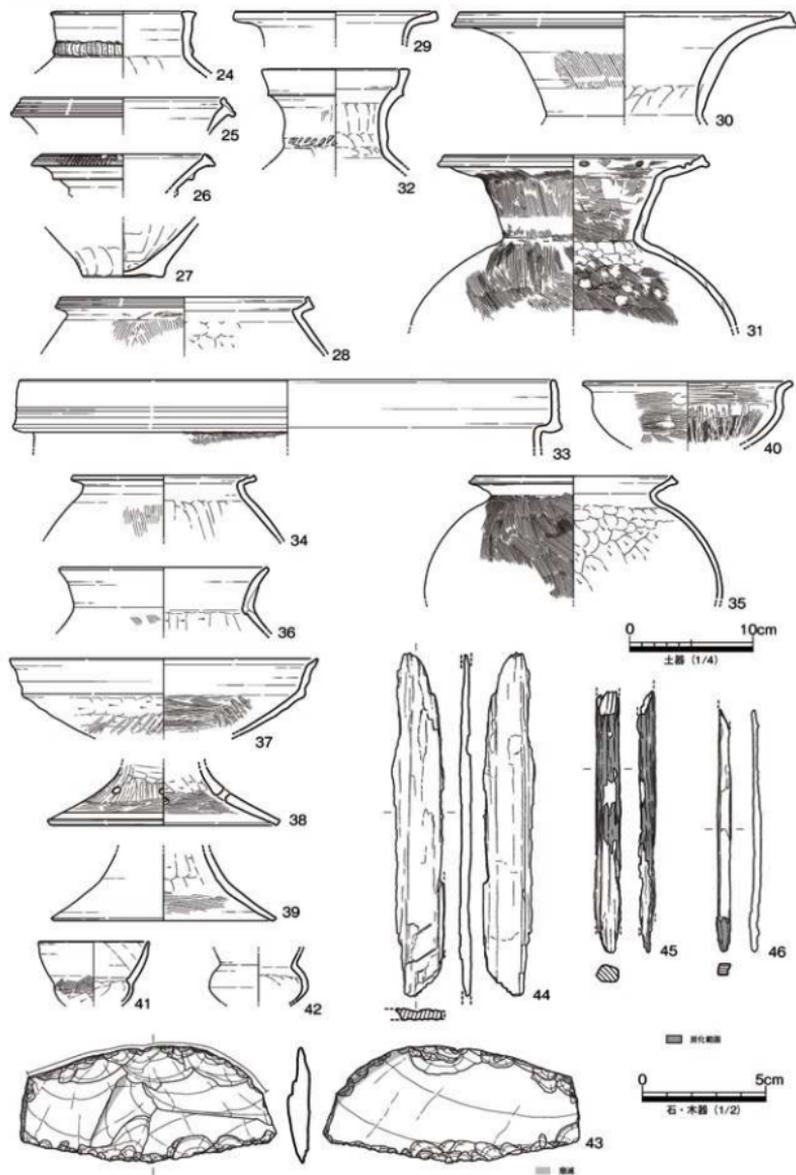


第32図 SR01 最下層出土遺物実測図

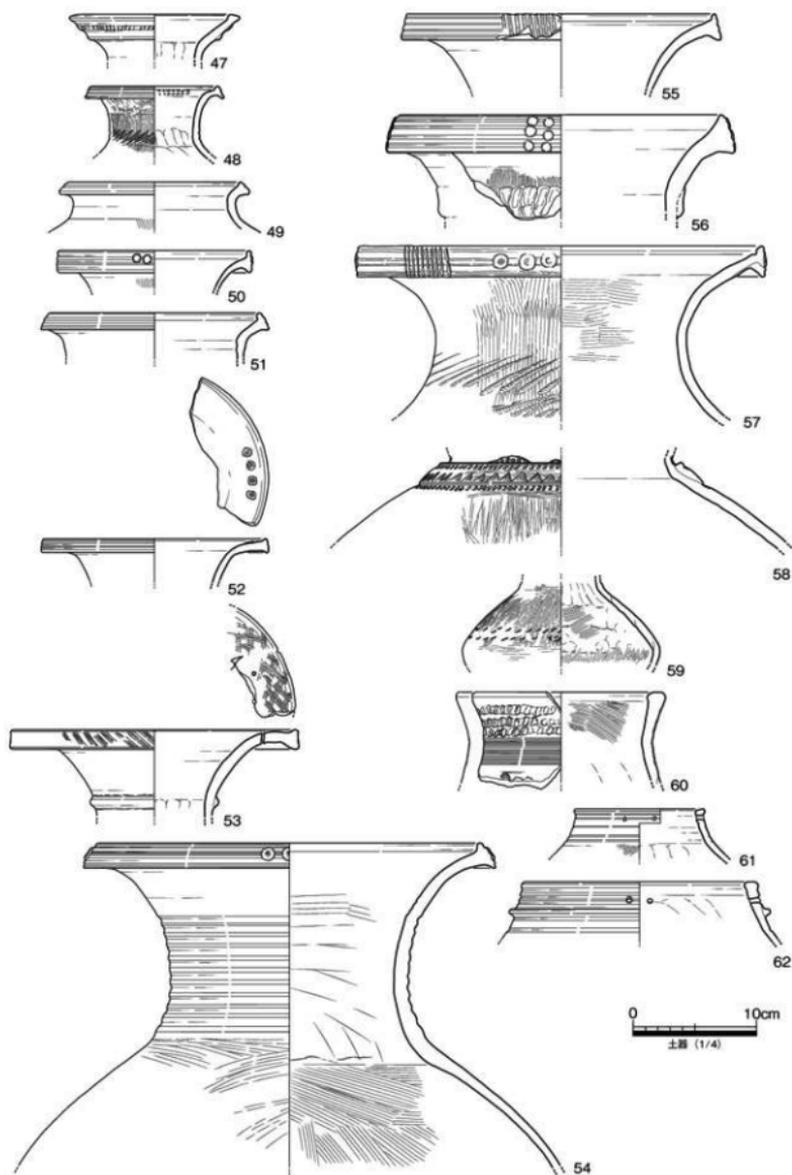
約3.8m、残存深約0.34mで、北半部の流路方向N 34.07° E、断面形は緩やかに掘り込まれた皿状を呈する。埋土は2層に細分され、下層の黒褐色砂礫層は溝機能時の水成堆積層と考える。流路底面の標高は、南端部で22.10m前後、北端部で21.70m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下する可能性が考えられる。

既述したように、本溝はIV区で西肩を大きくSR04に削られ、西肩部の状況は不明である。一方、SR04西側では東西溝SD62が検出されており、その東延長に本溝が位置することから、SD62は本溝より分岐し西流する可能性が高いと判断した。SD62は、検出面幅1.6～1.7m、残存深約0.21mで、流路方向N 78.57° Wと直線状に配される。調査時に、埋土は2層に細分されるとするが、上位層は平面図の掘り方を越えて溝上面を広く覆うように堆積しており、本溝埋土としてよいか断定できない。また、西延長部には本溝に後出するSR03が南北流し、SR03西側で本溝延長部が検出されておらず、西への延長は不明である。後述するようにSR03は弥生時代後期後半～終末期に流下埋没したと考えられるが、中期中葉の遺物も出土しており、流下時期は中期にまで遡る可能性がある。このように考えてよければ、本溝はSR03より取水し、SD63へ導水するため開削された可能性が考えられる。

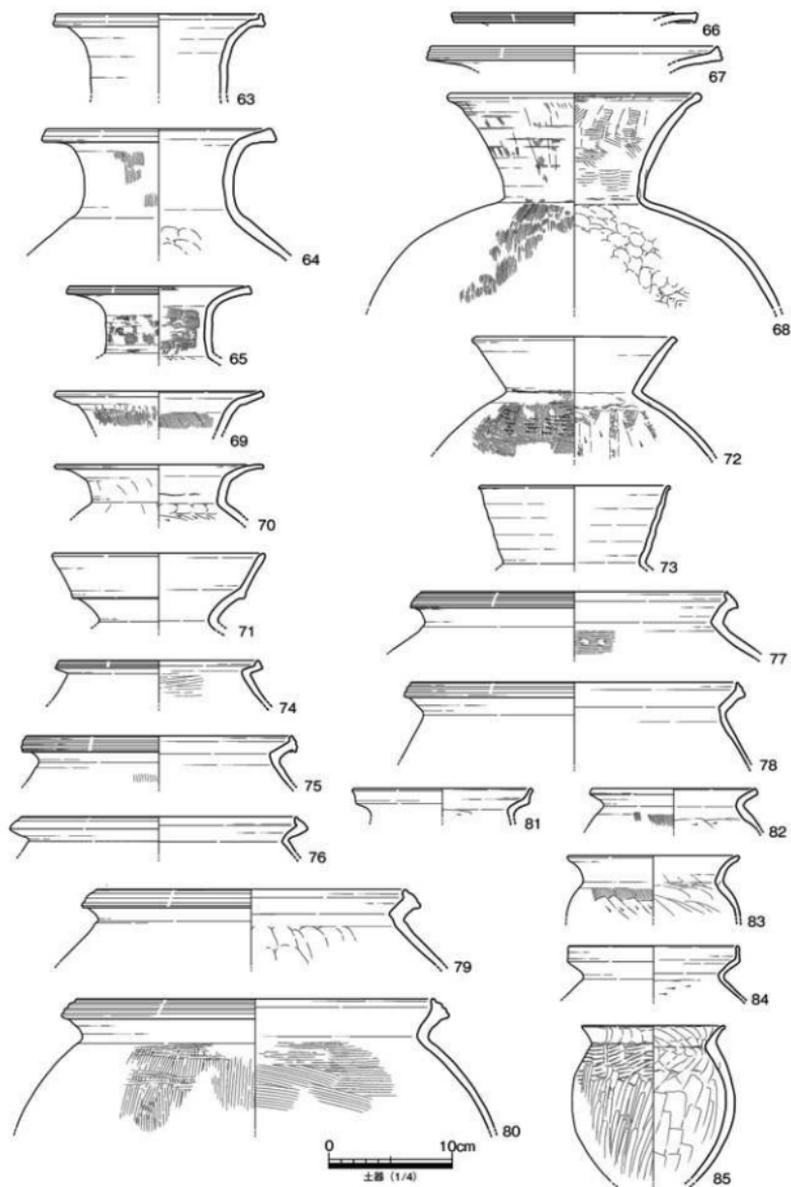
遺物は、SD63より弥生土器等の小片が若干量出土したのみである。いずれもIV区より出土したが、詳細な出土位置・層位は記録されていない。10は弥生土器広口壺。11は同壺の底部片。12は同台付鉢もしくは高杯の脚部片である。脚部には略円形の孔が穿たれるが、未貫通である。出土遺物より、中期末～後期初頭の遺構と考える。なお、2次調査区の報告書（香川県教育委員会2016）では、本溝の開削を中期中葉に遡らせて考えるが、上述した本調査区での調査成果から、その可能性を実証することは困難である。また、後期後半には流下していたSR03・04に切られることから、後期後半には埋没していたことは間違いない。



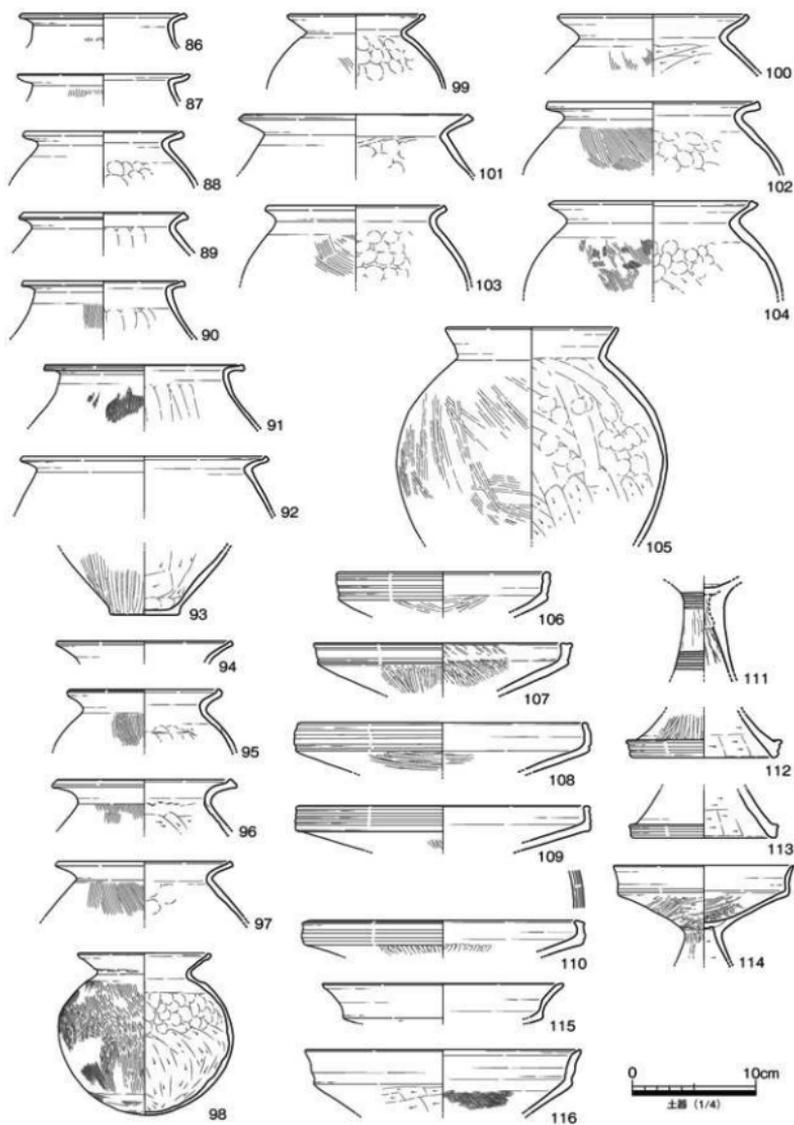
第33図 SR01下層出土遺物実測図



第34図 SR01 中層出土遺物実測図1



第35図 SR01 中層出土遺物実測図2



第36図 SR01 中層出土遺物実測図3